# Quali, 二〇一五年二月号

# 存在しなり

人間は、いろんな人から影響を受けているような気がする。

だが、気がするだけで、結局は自分自身だ。

児実にならない

他人との、協調体制、みたいなものが一番うそくさいものだ。 他人に教わって百を知るより、自分で持っている一を噛みしめるほうがましだ。 人と人とのつながりというのは確かにある。

ものだ。 びつながりが得られて何事かになったら、のんびり批評なんかする気になれない 確かにあるが、それはちまちました理屈でこしらえるものではないし、ひとた

誰かを愛するというのもそうだ。

本当に誰かのことを愛せたなら、愛とは何かとか、「愛はさあ」とか、眠たい

ことをぐずぐず言わなくなる。

それは結局のところ、手前の根性のせいなので、愛がゼロでもそのことについ 誰かを愛せればすばらしいが、愛せなかったとしても、それはしょうがない。

て、「フェアだ、不平はない」と、やけっぱちでも言うしかない。 最後の最後は、といっても、人間はいつだって最後の最後みたいなところに立

ということを残すぐらいしか、生きるといってもすることがない。 たされているが、最後はやけっぱちで道理や正義を採るしかない。 生きているうち、一つだけ、あるいは一度だけ、「あいつは正義を吹いたな」

僕はいわゆる、キモい人間だ。

そんなことは、よくよく考えれば、どうだっていいことだ。 今で言うところの、イタいとかクサいとかいうのも追加していいだろう。

僕は、キモい人間であり、イタい、クサい人間なので、あまり人とつるもうと

だから、そんな分不相応のことはせず、今後はねえよ、ただ今このときだよ、 キモい人間に「今後とも」と言われたらゾッとするだろう。 「今後ともよろしくねえ」と、誰にでも挨拶しようとは思わないのだ。

ということにいつもしている。 ただ一つだけの正義といえば、こんな僕のことも、心から愛してくれた女性は

## 元からの僕、

素晴らしい人に

ゲロを吐かせる

1

おいて、僕は僕のままでいなくてはならない。 その人は、このキモい僕を、心の底から愛してくれたので、せめてその仁義に

もよくなっている。 こんなことをまじめに考えているからキモいのだが、もうそんなことはどうで

分けだけでかまわない。 僕は「キモい人」で、その他すべての人は「素晴らしい人」、もうそういう区

ゲロを吐かせるために存在している。 そのときふと、これだ、とひらめいたのだが、僕はそうして、素晴らしい人に先日、吐き気がした、と言ってもらえる機会があった。

ないが、ただ一人の気がして、「悪くない」と感じた。 素晴らしい人に、ゲロを吐かせるためのワーク、などというものに何の価値も

それでいい、と、僕は心から満足できる。

素晴らしい人に、ゲロを吐かせるには、どうすればよいか

それは、ただ僕が、元のままの僕であればいい。

ら、それでよくて、後付けの工夫は要らない。 元々こういう奴で、元々からキモく、元々からいわゆるイタいしクサいのだか

を身につけ、工夫してきたけれど、それらのすべては結局にせものだった。 であって、その存在は僕ではない。 その工夫したやつを振り回している時は、何か工夫しているどうでもいいもの 素晴らしい人の世の中に、うまく関わろうとして、キモくない方法のいくつか

僕としては時間の無駄だ。

たとえば、僕は愛だのセックスだのを中心において、人に向けて話をしようと そういうことをしていると、自分が何をしたらいいのか本当にわからなくなる。

をしたとしても、それで何をどうしようとしているのか、何をどうすればいいのそれだけでも、いまどき時代錯誤すぎてキモいことこの上ないが、そうして話 か、よくわからなかった。

ここ数年は、特によくわからなかったのだ。

話す技術があったとしても、話す目的が特にない。

その目的がようやく明らかになり、僕はよろこんでいる。

されないことなのだ。 今や、時代は変わり、僕の目的は、 女性にモテることではなく、女性に一切愛

よいのであって、要はそこだ。 愛されないようにするためには、どうすればいいかというと、キモがらせれば

じゃない、元々の自前の僕としての、キモがらせ方が出来るかということだ。 その、キモがらせるというところで、可能な限り借り物じゃない、にせもの それを吐き気にまで引き上げていく。

嘔吐まで引き起こせたら本物だろう。

い。演出でそれをするのはイージーすぎて話にならない。 借り物でキモがらせても意味がない。演出でキモがらせるのはさらに意味がな

のやることはそれとはまったく別だ。 素晴らしい人は、素晴らしい人に吐き気なんか引き起こせないだろうから、

存在が別、ということかもしれない。

いるだろう。 素晴らしい人は、連帯しあい、共有しあって、素晴らしい人たちの世を作って

素晴らしい人は、そちらへ帰りなさい、ということになるのだ

さい、ということになる。 ただし、せっかくだから、存分にキモがって、吐き気をもよおしてから帰りな

ちろん、バカにして言っているのだ。 気の弱い読み手のために正直に話しておくと、 「素晴らしい人」といって、

あるわけじゃなし、かまわないだろう。 キモい側から素晴らしい側をバカにするなんて、よくある話で、別にルールが

分の存在は親に支配されている」とか思っている。 への依存に向かっている。若い人ほど制度に依存し、 、ひ衣存こ句かっている。若い人ほど制度に依存し、「家族が全て」とか、「自素晴らしい人たちの手によって、時代は今、本能回帰するように、制度や家族 「家族が全て」とか、

れている。煙草は毒ガス扱いだ。実現し、あとは、スポーツを信奉することで、現代の自己は満足する、と仮想さ 制度上で「偉い人」になり、やっぱり両親ですよ、家族ですよ、ということを

クにも、こういう時代があったのかもしれない、という気がしている。 あと、時代の特徴として、人々は同性愛に向かっている。いつかのニューヨー

こらないだろう。 夢やあこがれが広がるだろうが、男と同棲、という空想には、夢もあこがれも起 実際、多くの女性にとって、すてきな同性とのルームシェア、という空想には

見つからないだろうので、結局は異性とそういったことをするしかない。 それで、異性うんぬんは心理的にごめんこうむるが、婚姻は制度だし、結婚し かといって、同性愛に踏み切るには素質も勇気も要るだろうし、パートナー

恋愛を抜きにした婚姻が試みられている。 て「親に孫の顔を見せたいから」ということは正当に感じられるので、今は異性

か一種の救済のようにさえ感じられているところがあるのは、こういった背景か いわゆる婚活というやり方が、心理的に受け入れられやすくなり、それどころ

のではないかという気がしている。またそれは好評を博すのではないかとも思う。 予想するのだが、この先、テレビドラマなどで同性愛を扱ったものが出てくる

で活躍することを体験して、今ある自分を根本的に変えよう、というゆさぶりを 或る男性が、ホモセクシャルだったが、会社で主任に昇格し、プレゼンの仕事

ないだろうが、自分には愛した男性がいるのだ。そのことにケリがつかない。 嫁を娶り、嫁として愛する努力をし、家父として生きていくことは不可能では 幼馴染の女性と結婚する道筋があるが、どうにもそれに踏み切れない。

は殊勲賞を授与された。 彼はそれに応じ、かつて為しえなかった活躍を、そこで改めてやり遂げた。 そこに、かつて諦めて引退したスポーツからの、再度の呼びかけが来る。

彼

目で遠くを見るように見遣り、青春に別れを告げて、一人の夫となり、一人の家その拍手喝采の中、彼はかつて自分が恋をした場所、体育館のベンチを、細い 父となることを決断し、一人の社会人となっていった。

こういうドラマは、今すでに、人々に不潔感の印象は与えないだろう。

夜が更けていくようなドラマより、よっぽど清潔だ。「わかるわ」「あこがれる」男が女に恋をして、夜な夜な青春が「あいつを抱きたい」と煩悶する、海辺に わ」と受け取られるに違いない。

もう考えないし、口出しもしないことにした。 と、そういった現状を、時代のあらわれとして感じるが、このことついて僕は

僕は引き続き、キモい路線でいく。引き続きも何も、生まれつきこうだったの それは素晴らしい人たちのことであって、僕のことではないからだ。

ヒールでこけないように、祈りながらその後姿を見送る。 僕は男のままだし、男は女の尻を追い回す。女は逃げるので、走った女がハイ だから今さらどうしようもない。

あとは酒を呑んで過ごすだけだ。

夜な夜な青春が煩悶していていい。

のは自由だが、共有をリクエストするのは近所迷惑だろう。 ばれるような素晴らしいものは持ち合わせていない。キモいものは、単独で持つ 素晴らしい人たちは、連帯し、共有するが、僕は共有しない。共有してよろこ

僕を愛してくれた女たちに、あまりにも申し訳が立たない。 せめて僕などは、そうして単独に、元からの僕であり続けなければ、これまで

言わないにしても、心の中では深く傷つき、嘆き、深く悲しむだろう。 そういうがっかりのさせ方だけはしたくない。そういうがっかりを代償できる 僕が、連帯やら「共有」やらの中に溶け込んでしまったら、彼女たちは、 何も

言えるようではありたい。「あのときのまま、モテないままだよ」と。 ような値打ちは僕の生にはまったくない。 僕を愛してくれた女や、今も愛してくれている女に向けて、せめて堂々とこう

世の中のすべてが、素晴らしい人で埋め尽くされたら、それは逆に希望のない

そんな絶望的な世界にならないよう、 僕は素晴らしい人に、 ゲロを吐かせてま

いというところが、幸か不幸か、我ながら才能に満ち溢れているところだ。そうして、素晴らしい人にゲロを吐かせるのに、意図的な工夫がまるで要らな

僕は男なので、女が好きで、女の子を見れば「かわいい」と思う。何にも勝る、 こういったことは、意図的に企んででは、いつまでもは続けてゆけないだろう。

を、もう工夫する方策は捨てた。 胸のときめきというやつだ。冗談でなく、元から僕はそうで、 その元からの僕

耳から、脳を氷らせて危ない。 ワーッとした輝かしい、わけのわからない気持ちになる。風の清涼さも、 もちろん、女の子だけじゃなく、春の青空とか、白い雲とか、網膜に受けると、

カレンダーとイベントがなくても、春の公園だけで僕を殺せる。

ここの区分けだ。 素晴らしい人はそんなことであってはいけないし、そんなことはないだろう。

平等ということは、大切なことだが、僕のことだけ省いてやってもらいたい。 役所の人も、僕の戸籍だけは、ゴム手袋をして取り扱ってくれてい

僕はそれだけ本当に、キモい人間で、そのキモさからもう帰ってこないのだか それは、素晴らしい人たちの間でだけ大事なことだから。

とについて話すだろう。春の公園について話すだろう。 僕はきっと、これからも、愛とセックスと、それ以上に、未来や将来や夢のこ

それは、聞いてもらうための話ではない。

共有してもらうための話ではない。 ゲロを吐いてもらうための話なのだ。

からも無縁でいられる。 そうすることで、僕は堂々と話すことができるし、その他の、ややこしいこと

しい近づき方をしてきてくれる。 が、それこそキモいことなのだが、そうした慈しみの接触も、 善良をきわめる人は、僕のような人間にも、 連帯と共有を与えようと、 僕にとっては窮 素晴ら

屈にさせられてしまう類になる。

思いっきりゲロを吐いてくれたらいい。最大の不快感を表して。それが僕には で、僕が解決できることじゃない。 素晴らしい人が悪いのではなく僕が悪い。僕が悪いのだが、 素晴らしい人は、僕に素晴らしいものを向けてくれるのではなくて、目の前 しょうがないこと

番落ち着くのだ。 その、うそ偽りないゲロの胃液が、僕に対する完全な肯定になる。 ゲロを受け

るたび僕は磨かれるだろう。 工夫も要らなくて、このことに必要なものは全て持って生まれてきている。これ 性愛の話、 未来の話、夢の話、そして死の話をする。今や僕には何の

[元からの僕、素晴らしい人にゲロを吐かせる/了]

### さびしい

# どういうことか

夜があるのだ。 遠く聞こえる、どこかのテレヴィの視聴音まで。 世界は希望に満ち満ちていると感じる。 通りすがるタクシーの音から……

僕は夜を愛し、夜のある場所を愛する。 活気があるのに、静まり返っている。 誰もがそっと振る舞い、活気がある。

ここからしか全ての物語は始まらない。 愛するためには、何が必要ということではなく、邪魔者さえなければいい。 すべては場所を愛するところから。

のために戦わなくてはならない。 魔者さえなければ、人は自然に自分の世界を愛するようにできている。 だから、邪魔者に入り込まれないよう、工夫が要るし、場合によっては、獲得

本当は振る舞わねばならない。 そして、なにより、自分が誰かの邪魔者にならないように、そっと、慎重に、

メージ、あれは幻想だ。 CM映像では、そういう映し方しかインパクトを与えられず、伝わらないので、

大声を出して、テンション、大騒ぎ、というやつで、いいことになるというイ

やかましく騒がしいイメージにしているだけだ。 自分の普段の過ごし方が、СM的か、それとも映画的かということは、 誰でも

語を、自然に邪魔する存在になりつづけているだろう。 たまに気にしたらいい。 CMのほうに近い人は、おそらく誰かの邪魔者になっている。誰かの、 夢や物

この二十年ぐらい、僕の物語の横には、常に窓があった。

夜の冷気を、映し出し、活気を吸い込み、僕を循環させる窓だ。

窓が、僕を、人から切断し、世界と接続してくれる。 人から切断されなくてはだめだ。

孤独にならないと世界が見えなくなる。

人と寄り添うときは、本来、やかましくして世界を見えなくするのではなく、

そっと、孤独なもの同士が寄り添うのだ。 見えている世界を見失わないように。

すべてを台無しにすることができる。 張り立てれば一撃で台無しにできてしまう。携帯電話のカメラを振り回しても、 誰でも知るとおり、台無しにするのは簡単なのだ。簡単すぎるのだ。汚い声を

無しにして回ることになる。 もともと、世界を見失っている人は、何も意図しないまま、自然にすべてを台

本人の意志とは関係なくだ。

それは、その当人が、台無しに生きているからだ。

世界の見えていない人は、世界が見えていないことに、 本当は焦っており、 重

大な引け目と、劣等感を覚えている。

それで、慌てて聞きたてるのだ。自分が主役よと言わんばかりに

「ねえ、世界ってどんなの? ねえ、ねえ」

聞けば答えられる権利があるかのように言い立てる。

世界の見えていない人は、他人に帰ってきてほしいのだ。

一緒に、世界の見えていないところに引きずりおとして、同じよ、ということ

に、どうしてもしたくなるのだ。 それは、一種の悲鳴みたいなもので、気持ち一つで抑えられるようなものじゃ

さびしいというのはそういうことなのだ。

邪

その茫漠さとは意味が違う。

だろう。耐えられるどころか、誰でも求めさえする。 世界が見えて、只中に自分が一人いる、そのさびしさは、 誰だって耐えられる

それは、世界が見えている孤独は、うつくしいからだ。

美の体験が直截あるので、その茫漠とした心地が、むなしいとはまったく感じ

いのする、美のない、人間を最も見苦しい形で打ちのめしてしまう何かだ。 その悪しきさびしさのうち、人は、むしろ内心がとてつもなく騒がしくなって さびしいというのは、もっと破滅的で、<<不潔な不安が主成分であり>>、

さびしさの悲鳴が反響して、心の内が不安と狂気に満ちていくのだ。

さびしさとは静寂ではなく騒擾なのだ。

このとてつもない、内心のさわがしさ、すべてが心の内に反響するだけのどう

ヴィを点けるのだって、そのごまかしには役立つだろう。 それで、人と群れようとする。さびしさをごまかすために。擬似的には、テレしようもなさ、破滅的な感触に、人はとうてい耐えられない。

るか、人と群れるかして、<<心の内の騒がしさを、外側に出してしまう>>。それ 内心の、とてつもない騒がしさ。これがさびしさなのだから、テレヴィを点け

で、外部的にもとてつもない騒がしさになる。 心の内の騒がしさを、ねじふせられるぐらい、外側が騒がしくなってくれたら どれだけにこやかに集まっているふうでも、本当の目的はそれなのだ。

とにかく外に放出したい。群れる中、相手だってそのことをしたらいい。心の内で悲鳴がこだまする、その騒がしさ、果てしない反響を、形を変えて、 身体が騒がしく、動作や挙動が、忙しくなってくれたらいい。

度が異様となる。 だから、そうして起こる群れと騒がしさは、誰もが知るように、騒がしさの程

見える。実際に、助かっているのかもしれない。さびしさが一時でもごまかされ るのだから、そのときは一定時間だけ助かっている。 その渦中の当人らは、誰もが楽しそうに、救われたように、笑顔でいるように

そうして大騒ぎをしたら、鼓膜が痛いうちに、眠ってしまわなくてはならない。 しかし、助けられているようで、救われてはいない。

うちに、眠らないといけない。 する不安と狂気の、さびしさがやってきてしまうから。 鼓膜が痛んでいるうちに、身体がきしんでいるうちに、筋肉がひきつっている 鼓膜の痛みが静まってしまえば、また例の、耐えがたい内心の騒がしさ、反響

あれは、そういうことのための、一時の遊興だ。誰もそこまでは否定しない。 うことを、どこかの感触で直観している。 だが、それに取りつかれたように通う人が、真実は「さびしい」のだろうとい パチンコ屋の店内が、鼓膜を痛めるほど騒がしいのは、誰でも知るとおりだ。

さびしさは内心の静寂ではない。

ように、抵抗できず響きつづける耐えがたいさわがしさなのだ。 その逆で、さわがしさだ。内心の、狂乱の反響、壊れた機械のハウリング音の

があって、それに触れればそれ以上、人は救われたいなんて思わない。 人は、一時的には助かる代わり、ますます孤独から遠ざかっていく。翌日の夜、 さびしさをねじふせ、ごまかすために、外部的なさわがしさを自ら手当てする 内心が静寂であれば、孤独を得るが、そのぶん世界が直截見える。そこには美

内心は昨日よりなおさわがしく反響する。 こと、恐ろしく苦しいということを、認めはしない。必ず反論してくる。 さびしさに苦しめられている人は、自分がそうして、さびしがっているという しかし、出てくる反論は大声だ。

な声の音量がよいかわからなくなっている。すでに、人と話すのに適当な声、人 に伝える声という感触が、わからなくなっている。 常時、内心の騒がしさに苦しめられている人は、もはや外部的にも、どのよう

が壊れ、言葉が壊れ、目つきが壊れてしまう。 さびしさとはそういうものだ。人を振り回し、 その中でおそらく、声が一番、外部的にはわかりやすい。 壊してしまう。 声が壊れ、 表情

だから僕は、そういったものが見当たらない夜が好きだ。

邪魔者のいない夜。

そのとき僕は、夜を愛していたことを、 昨日ぶりに思い出す。

つながっている。 僕の大好きな夜が、窓の網戸を通して、 僕の呼吸するところへ、また頬の肌

ての物語の始まりだ。 好きな夜があり、好きな窓がつなぎ、そこが好きな場所になること、 それが全

どれだけ鼓膜を痛くしても、そこから物語が始まることは決してない。残念ながら、ここ以外に、物語が始まることはありえない。

心の内が騒擾なら、人は外部的にも大声になってしまうように、 心の内が静

なら、人は外部的にもそっとしている。

そっとして、慎重に振る舞うので、そういう人は、 誰かの邪魔者にならなくて

だから、共に物語をゆける人があるのだ。

物語の始まる、必ずここという場所に、邪魔者にならず一緒にあれる人がある

何かのシャッターが開くモーター音が遠く聞こえている。 窓の外は、まもなく新聞配達が始まるだろう。

まだ昏いうち、朝が来たのだ。

中に立たされたとき、まず正反対にあることを答えればよい。 さびしいとはどういうことか。さびしさとはどういうものか。 この問 いかけの

人が満ちているというとき、何があるから満ちているのか。

それは、心の内の静寂だ。

世界が見え、直截の美、ここからすべての物語が始まるから、 人はそのとき

さびしくないのだ。 [さびしいとはどういうことか/了]

日本人平均から比べると大柄だが、駅ビルと同じぐらいというほどには大きく 僕はここにいるわけだが、僕のサイズはそこまで大きくない。

「立って半畳、 寝て一畳」というが、実際に足の裏で踏んでいる面積はもっと

僕のサイズは、駅ビルほどには大きくないので、 駅前の駅ビルが何なのかにつ

いて、考えなくていいし、知らなくていい。

それは僕が「社会人」ではないからだ。 新聞には新聞記事が載っているが、別に知らなくていいだろう。

てこないだろうから、僕は社会人ではない。 僕の肉と骨を切り裂いたとき、僕の肉からは「社会人」と書いてある証拠が出

ろうから大変だが、僕はそこまでサイズが大きくないので、せいぜい、足元のタ 社会人という人は、自分のサイズが社会と同じぐらい大きくないといけないだ

イルと、手元のライターぐらいがわかっていればいい。

もっと狭く、もっと狭くだ。

僕は自己の事実に沿おうとしている。 自分のサイズに適合するまで狭く小さくする。

不可能だろう。 宇宙の何パーセントに用事がないか、これは、天文学的な桁になるので、 宇宙がどれだけ巨大だろうが、それは僕が巨大なわけではないので、関係ない。 表記

それは僕のサイズについての物理的な事実だ。

ではないだろうし、僕の肉の身のうち、自己はさらに小さいはずだ。 僕のサイズといったって、僕の肉の身の端から端までが、僕の自己というわけ

半畳のスペースも、本当は要らないのじゃないかと思う。

ようなので、この梱包分の体積はかさばるのだ、これは致し方ない。 僕は今、東京の目黒区に住んでいる。 ただ、宅急便のように、自己というのもこの肉の身にどうやら梱包されている

る山手通などを見るが、どれを見ても僕より巨大なので、 à山手通などを見るが、どれを見ても僕より巨大なので、僕はそれらについて知それで、たくさんの人や、勇壮なビルや、無数の自動車と、クラクションの鳴

僕の世界ではない、と感じる。そんな巨大なものは僕の世界ではな

しながら歩いている。 街中を歩くたび、街があるのはわかるが、 これは僕の世界ではないな、

と実感

別にどこの街でも同じだ。

などというものは存在しない。

自分のサイズが街と同程度にならない限り、 僕の街、 などというものはありえ

だから、 もっと狭く、 もっと狭くだ。

しろ、僕の街ではないのだから、借り物だ。 いつも、よその世界、借り物の世界の中を、 歩いているように感じている。 何

み、バレないようにそそくさと動き回っているだけだ。 借り物? というよりは、ただそこに放置されていたものに、勝手に上がり込

僕はそうして、「僕の世界ではないなあ」と感じながら、そそくさ歩くことが

割と好きだ。

ちりあると感じられる、その確かな感触も好きだ。 それが僕の世界ではないぶん、借り物の世界が、 何か、忍び込んでいるような、悪いことをしている感触があるのも好きだ。 「借り物の世界」としてがっ

いてほれぼれする。 駅ビルなど、つい見上げてしまう。借り物の世界は「すごい!」と、見上げて

世界にしたい、とは思わない。 が、なぜか同時に、興味はなくて、見上げた駅ビルと借り物の世界を、自分の

それは結局、僕自身のサイズがそんなに大きくないからだろう。

欲しい、とは思わない。 まるでガリバーの洋服店を見上げる小人のように、 「すごい!」とは思うが、

ない。僕の世界は、僕のサイズに合わせてちゃんとある。 この借り物の世界の中、僕の世界はどうかというと、僕の世界がないわけでは

の目には見えないだろう。 ただ、借り物の世界と比較すれば、あまりにも小さなサイズなので、大きな人

たとえば、借り物の世界を、一人の女性が歩いているとき、彼女は借り物の世

界のもので、僕の世界のものではない。 トルの細道は僕の世界だ。 が、もし彼女が、僕に向かって歩いてくる場合。数メートルだが、その数メー

それだけでも、割とパンパンの満員、という感触だから、 僕の世界は小さく、世界の住人は、そのとき僕と彼女の二人しかいないだろう。 僕の世界はそれぐら

これを、もっともっと、小さく、狭くする。

しんどい感じがするだろう。 大きすぎる、ひどい欲張りだと感じるのだ。第一、彼女にとっても迷惑で、何か 数メートルの距離にある彼女と細道を、僕の世界のものとするのは、それでも

いいじゃないか、と思う。 別に彼女が、 借り物の世界のものであっても。 別に

僕の世界のものじゃなくていい。向こう側の、駅ビルと山手通に属する、借り物 の世界のものであっても、構わない。それでも、こっそりお話ができないわけ

限られたものだけでいい。元々、そういうサイズなのだ。僕の世界のものにするのは、よほどの近しい、これはさすがにという、 特殊な

思うのだ。 彼女がそうして、僕の世界に入らなくて済むのなら、彼女はきっとよろこぶと

それが、どこまで近づいても、まったく僕の世界に入らずに済むということな 世界をいちいち移動するというのは、大変で面倒なことだから。

なんというか、彼女は彼女の庭から、僕と話せるのだ。僕の世界に入り込まず 彼女はきっとすっきり気楽で、よろこんでくれると思う。

いちいち人の家の門をくぐって、入らないといけないというのは、 気が重いし、

に済むというのはそういうことだ。

きっと気楽だ。 それが、どれだけ近づいても、 門はない、入らなくていいということになれば、

むというのは、どれほど助かるものだろう。 人の家に入らなくて済む、人の世界のしきたりに、いちいち付き合わなくて済

お地蔵様が立っている。 そうだな、たとえば街中のあちこちに、小さなお地蔵様の社がある。 社の中に

れぐらいの広さでいい。 僕の世界というのは、ちょうどあの、お地蔵様がすっぽり収まっている社、 あ

実質、「狭すぎて入れないでしょ」というサイズだ。

あのサイズなら、入れっこないので、見た目に明らかで、人に迷惑を掛けずに

扱ってもらえるかどうかは、サイズに関係ないだろう。 それで別に、お地蔵様がないがしろにされているわけではないし、きちんと

いはずだ。 もっと狭く、もっと狭く、人が入れっこないサイズの世界にすれば、 豪邸で、大仰な門をくぐらないと、大切にしてあげません、ということではな

そうすれば、この借り物の世界の中を歩くにも、 お邪魔させてもらうのにあま

り迷惑がないはずだ。 それで、僕は僕の世界を豊かにする。

豊かな世界の中に住むということには、うれしくなる希望がある。 すてきね、とは、やはり言ってもらいたいから、豊かにしよう。

豊かな世界

この狭さに限っては、 狭い分、隅から隅まで豊かにしたい。 そのことが可能なはずだ。

> 見物は自由だし、見物してもらうのは割と好きだから、見物をどうぞとアッ 僕は僕を取り巻く周囲五センチだけ僕の世界であればい

ピールしていこう。 これが、周囲十センチとなると、どうか。ちょっと、豊かにしきれる自信がな

いない。 い。周囲十五センチとなると明らかに無理だ。僕にはそこまでの器量は具わって

なってくる。 その器を大きくすればするほど、その全体を豊かな料理で満たすことは困難に 器量というのはよくできた言葉で、実際の「器」を思い浮かべればわかるが

僕にはやはり、 せいぜい周囲五センチ、努力を尽くして十センチがせいぜ

(と言いながら、やっぱり十センチは無理だという気が猛烈にしてきた)

世界を、狭く、狭くする。

ご迷惑をお掛けせずに済む。 これなら、少々近づいてきてもらっても大丈夫だ

しているに違いない。僕にはわかりっこないサイズ、わかりっこないスケールの一方、借り物の世界のほうはどうだろうか。きっと、今日もめまぐるしく変動 ことだ。

器量で人を責めないように。 しい。たとえ周囲五センチでもだ。これでも僕には相当忙しいのだ。そのへん、 世界を豊かにすることには夢がある。そして、豊かにするには、それなりに忙

も、やはりそれ自体が幸福だ。眠るのも起きるのも幸福に包まれている。 これがきっと適性サイズということなのだろう。 世界を豊かにすることは幸福だ。そのことに向けて、次々に忙しくあれること

[もっと狭く/了]

### 光と闇の 織物

ひとつ、このことをやってみようじゃないか。

場所、物音、風、冷気や熱気…… 心の内が静寂だと、感性がすべてを吸い上げる。

ないだろうか。 これは、ただ感性と言わず、また単に感じることと言わず、これは想像力では 誰もこれを想像力だとは認知しないような、最も底辺に張りつめているこの感

実は単純なことなのかもしれない。

ないかのように見えるだろう。 明るく照らした室内で現像しようとすると、まるでフィルムには何も映ってい フィルムの現像は暗室内で行われる。

きつい光がフィルムを感光させ、全てを消し去ってしまうのだ。 元々、フィルムには何かが映っていたかもしれないのに。

ここになにかしらが映り込むわけだ。 人間の心の底には、想像力というフィルムが張られている。

きつい光を当ててはいけない。フィルムは真っ白に消し飛んでしまう。 もちろん映像だけでなく、場所、物音、風、冷気や熱気、その実存が映り込む。

室内を明るく照らしてしまう電灯が自我だ。

自我をパッと通電させると、フィルムは白く消し飛んでしまい、そこに映って

いたものがもう見えなくなる。

ものではなく、自然に映り込むものなのだ。 ん人間の能力だが、それは銀塩フィルムのような性質のもので、自ら捉えにいく そのことを確認するためには、暗室にて、いくらか辛抱強く、 人間が、感性、そしておそらく想像力に物事を捉えられるというのは、もちろ 現像が徐々にな

されていくのを、見守っていなくてはならない。 今自分のいる場所。あるいは、かつていた場所。

これが「何」なのか、「どのような」ものなのか。 今聞こえている物音。今吹いている風。今たゆたっている冷気や熱気

捉えようとして、自我をパッと通電させると、その途端に、もう何も見えなく

「何」なのかわからなくなる。 映り込むものが見えなくなり、 明るくすれば明るくするほど、 見えなくなるのだ。 今自分のいる場所、 物音、 風、

冷気や熱気が

暗室には有効な光がない。

同様に、その暗室には、有効な音もない。

せっかく映り込んだ豊かな声が、ノイズに消し飛んで、もう何も聞こえなくな 想像力のフィルムには、音も映り込むから、きつい音を当ててはだめなのだ。

「音」ではない 驚いたことに、想像力のフィルムに映り込んでいるのは、声/voice であって

フィルムに映り込むとき、それは声/voiceであって、物理的な音波ではない。 どれだけ豊かな音楽の演奏も、どれだけ豊かな人間の言葉と声も、 「声/voice」は無音なのだ。無音の「声」として、想像力のフィルムに映り

込むから、人間にはそれが「聞こえる」と感じられる。 激しさを伴って届いた「声」も、その物理的な音波としての激しさはまるで想

像力のフィルムに映り込まない。「激しい声」として映り込んだそれは、やはり 無音の声/voiceとして「聞こえる」のだ。

され、闇と織物をなしている。 音はまるでなく、しかし声はありありと聞こえる。暗室に、光は繊細に描き出 想像力のフィルムに映り込むものに、有効な光はなく、また有効な音はない。

自我を休眠させると、心の世界は暗室になり、無音になる。

ただそうなるというだけで、このことを偉大だとか、立派だとかは言えない。 そうすると、じわじわ、想像力のフィルムに世界が映り込んでくるのだ。

ただ、膨大なものが映り込むことは間違いない。 何しろ、そういったことを言いたがる自我のほうは休眠中なのだ。

問題は、このことに「方法」がないということ。 それは、想像力のフィルムの、性質であり、性能だ。

「方法」など無いままに、元からそう具わっているということ

法」自体が、自我への通電なしには用いえないということ。 「方法」を考え付き、「方法」を用いるのは、自我のほうだから、この 方

ただ、僕は、このことを〈知っている〉〉。

知っている >>。 世界が「何」であるかを見、世界の声を声/voiceとして、 直接聞くことを^^

目の前に置かれた文章も、また自分で書き進めている文章も、

とが、認知や予想と正反対なので、意外すぎるのだ。 あるか、直接捉えるということを〈知っている〉〉。 これは思いがけないことなのだ。 光を消し、音を消すことで、まばゆい世界が、声を豊かにして現れるというこ

光を消すほどに見えてくる陰影などありえようか?

音を消すほどに聞こえてくる声などありえようか?

とが理解可能になる。 それが、想像力の銀塩フィルムだと例えることで、論理的にありえるというこ

自我はきつい光を放ち、 きついノイズ音を立てる。

ように予想される。 自我に強く通電すれば、そのぶん光はまばゆくなり、 音声は豊かに響きわたる

しかし予想に反するのは、 人間の心が、それら光と声を捉える、仕組みにおい

ら、それはきつい光ときつい音声を降り注がせればいいだろう。ザルカゴには じゃんじゃん光と音が受け取られ、豊かになるはず。 もし、人間の心が、降ってくるものを受け取り集めるザルカゴのようなものな

バリケードでしかないからだ。 ザルカゴは、実は受け取り集めるものではなくて、加害物から心を守るためのしかし、人間の心は、その仕組み上、そのザルカゴのものを受け取りはしない。

はならず、ただただしんどい。 バリケードのためのザルカゴに、 豊かにガレキが積もったとして、 心は豊かに

ザルカゴが空っぽだというとき、実は豊かだということ。

に、どれほど有利で上等なことか。 その、空っぽで何もないということが、実は想像力のフィルムに世界を映すの ザルカゴが空っぽだと、そのとおり、空っぽで何もないように思える。

物品としての銀塩フィルムのように、写真に焼いて出来上がり、というわけに もちろん人間の機能のことであるから、想像力のフィルムはナマモノだ。

態にしておかねばならない。 暗室で、フィルムに世界が映り込みはじめたら、そのまま、 映り込み始めた状

きつい光を当てたら、映り込んだ世界は消し飛んでしまう

を辛抱強く待つしかない。 そうしたら、またなんとかして光を消し、暗室にして、再び世界が映り込む

は、とんでもなく超高感度だ。 る人の、その姿がどれほど人の想像力のフィルムに、姿を映しこむことか。 /voice が、どれほど人の想像力のフィルムに、声/voice を映しこむことか。 フィルムには、高感度フィルムというものがあるが、人間の想像力のフィルム 想像力のフィルムに映った世界を見ながら、映ったままをそのままにたたずめ 音のない声/voiceを聴きながら、それを消さないままに話せる人の、その声 願わくは、その映り込んだものを、消さないようにして、人とあるべきだ。

ルムに光を照らし、オーイと呼びかけるようなことをする。 想像力や、感性や、感じることに「興味」を持ち、その興味から想像力のフィ 部屋の明かりなど論外に強すぎ、議論の喧騒など論外に強すぎる。

その途端、超高感度フィルムは台無しになるのだ。

信じられないほど豊かに微細に写し取るものだ。 そんなことをしなくても、想像力のフィルムは、ごく微細な情報から、

我々には「何もない」としか思えない。 想像力のフィルムに映り込むために必要な情報量は、 あまりに微細すぎて、

ぐ過剰になる。 その、「何もない」としか思えないような情報量で十分なのだ。それ以上はす

今度はそちらのほうが当たり前に思えてくる。 電灯をつけて、咳払いをした途端、フィルムは真っ白に消し飛び、消し飛ぶ、暗室の、静寂の中で、ごく当たり前のように、豊かな世界が現像されていく。 消し飛ぶと

だから、「方法」ではなくて、直接やるしかない。 「方法」はなくて、「方法」に通電した途端、何もかもが真っ白に消し飛ぶ

場所、物音、風、冷気や熱気……

僕はそれを直接やることを〈〈知っている〉〉。

が、本当は、〈〈誰しも知っている〉〉のかもしれない。 ひとつ、このことをやってみようじゃないか。

一定の時間をかけて、しばらくの間、ずっとこのことを。

ずっとこのことだけを。

どうなる?

場所、物音、風、冷気や熱気の映り込む中である [音無き光と闇の織物/了]

# 寝るわけがなり

休みして、世間話でもしよう

(先日のコラム参照)。 僕は、人をキモがらせればよいのだ、という発見は、非常に有用で偉大だった

(いや、参照しなくていいや)

いるところと違う。 何しろ、僕の考えていること、思い描いていることは、まったく他人の思って

モがられるしかないのだ。 この差を超えて、自分の思い描くことについて言おうとすれば、それはもうキ

疲れたら横になって寝るものだと思ってやしないか。ふと思うのだが、みんなして、夜は寝るものだと思い込んでやしないか。

違うだろう。

夜は起きているものだ。寝るならせいぜい朝だ。

老人以外は、単に力尽きたら寝る、失神する、というだけで、まさか「夜だか 夜に寝るのは老人だけだ。ドのつくド老人だけだ。

ら」というだけで眠る準備に入ったりしない。 そりゃもちろん、何もやることのない人なら、夜はもう寝てしまってもいいの

どうせ、寝るぐらいしかすることもないだろう。

が、やることのある人は別だ。

夜に寝てどうするんだ、冗談にしては強度がエグすぎるだろう。

そいつをやりこんでしまい、気づくと朝になっているんじゃないのか。 別にそうでなくてもいいが、もしそうでなかったら、人間は何も成長しない。 老人以外は、毎夜、何事であれ、いつものことにいつもどおり憑りつかれて、

そりゃそうだ、夜になったら寝てるなどということはありえない。 ーミリどころか、一ナノも成長しないだろう。

そんな人間がわずかでも成長するわけがない。

刑務所にブチこんでやってもいい。 付き合っている彼氏が夜に寝たら、それだけで別れていいし、何なら通報して

僕は、正直にいうと、ここ数年来、〈〈何かをやっている人を見たことがない〉〉。 若さのある人間が夜になったら寝るなんて準犯罪みたいなものだからだ。

ウソだと思うなら誰でも自分で確かめてみればいい。 「何かをやっている人」をまったく見かけない。

てみたらいい。 街中で、誰でもいいから、「おっ、ヘトヘトだな」と見た目にわかる人を探し

いないはずだ。

ヘトヘトになっていないものを、 「何かをやっている人」とはいわない

単純なことでいいのだ、たとえばオセロゲームでもいい。 オセロゲームを、やりまくったなあ、いったい何時間やったんだ?

チカする。

顔が、全身が、わけもわからずウヘラウヘラ笑ってしまう。

まっすぐ歩けない。

両方だ、ウヘラウヘラ、という状態。 頭が痛い、が、それ以上に麻薬的に侵されているので、痛いの気持ちいいの

コンビニに行こうか、といって、連れだって歩くが、脳が酩酊しているので、

コンビニを通り過ぎてしまう。

歩きながら、頭の中では、しつこく盤上に白と黒とが飛び交っている。

「何かをやっている人」というのは、

毎晩そういう状態

になる。

どんなジャンルでも、

それを、 「うわあ、オセロになんかハマっちゃった。もう三時間もやってるよー。

みたいな感じで、それを「オセロやってました」みたいな扱いにしてはいけな

三時間って。

そのへんのサラリーマンの通勤時間程度じゃないか。

僕は、ガキのころ、手品に凝っていて、あるカードテクニックを、 鏡の前で十

時間立ったまま練習したことがある。

たしか、トイレにもいかなかったような気がする

練習していたら勝手に十時間経っていたのだ。 別に努力したつもりもなければ、特訓したつもりもない。

いだろう。 そんなもの、 「餃子の王将」の厨房で働く人に比べたら、体力的には何でもな

ましてこちらは、自分で自分の好きなことをやっているのだ。

十時間ぐらい練習すれば、一応、自分でやりたかった動作の、初歩的な形ぐら

いは身についてくれる(ただし一秒も気が逸れなかった場合に限る)。 最近、本当に驚くのだが、たとえばそういう練習一つにしても、三十分ぐらい これを、「かじった」という。 その技術を、かじった程度には、一応知っています、ということになるのだ。

寝よ

やったところで、

こんなこと、できる人ってやっぱりすごいと思います」 「ふう、疲れました。難しいですね。どれだけ難しいかわかった気がします。

と、なぜか知らないが、勝手にエピローグに入る人がいるのだ。

これについては、僕は正直、開いた口がふさがらない、という気持ちに毎回な

練習が、三十分しか持続しない、ということについては、まあ目をつぶろう。

たり、苦手なジャンルだったり、色々あるだろうからだ。 趣味が合わなかったり、興味がなかったり、面白くなかったり、才能がなかっ

感想を述べるタイムに充てるのが、僕としては意味不明なのだ。 それは構わないのだが、三十分ほどいじってみたことについて、 五分もかけて

三十分の体験で、感想なんか得られるわけがない。

脳みその構造がどうなっているのか、正直、僕にはわけがわからない。

これは別に、何かを攻撃して言っているのではなくて、本当にわけがわからな

なんとなく今申し上げておきたい。 物事の見方にギャップがあるからなのだが、少なくとも僕のほうからはそうだと、 少なくとも、僕のほうからは、「えっ????」と見えているのだ。たぶん、

いが……

僕は、気質的に、人にネチネチ嫌味を言う趣味はない。

(最大級の悪口をブチこむ趣味はある)

である状態に。 ずっと前、あったように、若さのあるすべての人が、街中で全員「ヘトヘト」ただ僕は、ずっとあこがれ続けているのだ。

それで、誰も彼も、まっすぐ歩けずウヘラウヘラしている状態にだ。

全員が、何かをしている人なら、毎日そうならないとおかしい。 あこがれているのだ。

だから、そうならないほうがおかしいのに、と、首をかしげてあこがれている

でに描かれているので、なぜそのとおりにならないのかが、不思議でならないのそのヘトヘトとウヘラウヘラの毎夜が、どのようなものか、僕の想像力にはす

単純な不満というやつだ。

よ、ということなら、それでもいいだろう。 いや、まあ、百歩譲って、誰もそんなヘトヘトとかウヘラウヘラとかしません

「何かをやっている」という自負や看板は取り下げるべき

ような人は、数学的に「何もしていない」ということが証明されている。 へトへトになるというのは、疲れている、ということではない。 「ここ数か月、いや数年かなあ、ヘトヘトになったりしていないなあ」という

> 分なく疲れられるだろう。 疲れるというだけなら、満員電車で舌打ちをしあって過ごせば、 誰だって申し

うことの方法は、今や巷にあふれている。 情緒不安定な上司と席を隣にすればいくらでも疲れられるので、

ヘトヘトになるというのは違う。

別にオセロでもいいし立ち合いでもいいし考究でもいいしセックスでもい 気が付くと、

「えつ、今何時?」

「うわっ、もう朝の四時だよ」

「え、さあ、もうなんか、ちょっと計算できないぞ」 「ウソ! え、じゃあ、これって何時間やってたの

というように時間が過ぎている状態だ。

それがヘトヘトになるという状態だ。

誰でも記憶に心あたりがあるだろう。

もちろん、ごく例外的に、そのこと自体に心当たりがない人もいるかもしれな 何かを「やる」というのはそういうことだと、本当は覚えているだろう。

らない、となる状態のことだ。 界や脳細胞の圧力限界など、どこかの器官に臨界がきて、 ね」と、寝る準備を始めるような人は、「何かをやっている」とは言わない。これが、朝の四時まで突っ切るどころか、夜の十一時になったから「そろそろ や、関節の可動可能回数や、筋繊維に含まれるグリコーゲン量や、粘膜の耐用限 「力尽きる」というのは、気持ちの問題ではなくて、眼球の水分供給の仕組み おしまい、休まねばな

力尽きたあとどうなるか?

り始めるのだ。 そして、むっくり立ち上がり、昨日力尽きる前にしていたそのことを、再びや 力尽きたあと、記憶ははっきりしないが、とにかく起きて「あ」となる。

力尽きたものが、回復されたので、 力尽きる前に戻るだけだ。

みんなしてゴソゴソ、昨夜と同じことを始める。 それで、周りもごそごそ起床して、「おう……」「おはよ……」となる。

それが「何かをやっている」という状態だろう。 誰かが気を利かせて、ボサボサ頭のまま、全員分の朝食を買い出しに行く

そういう状態にある人を、ここ数年来見ていない。

僕は何も、しんどいことをしろ、とは言わない。

しんどいことなんて世界で一番僕こそが避けてまわっている。

そうではなく、「何かをやる」ということは、別にしんどくないことだ。

何もやっていないのに、前もって疲れているのだ。 <<何もやっていない人こそが、しんどい様子>>。

なぜ逆転しているのだろう。

そういう群衆を、ここ数年間眺めている。

いい、夜明けまで若い人間が集まって活性化しているカフェなど東京のどこにも 僕は今、東京の目黒区に住んでいるし、しょっちゅう渋谷に行くが、断言して

熱い話をしている組など夜中の東京でどこにも見つからないだろう

みんな寝ているのだ。 ブーたれる余地はどこにもなく、ただの事実として、すでに東京では朝まで

やっている店が激減している。 深夜の東京といえば、二十四時間営業のファミレスに、スナックの仕事上がり

して眠っている姿があるだけだ。 のおばさんたちが愚痴を言い合う声があり、肉体労働のおじさんが一人で突っ伏 例外は、風俗店ひしめく歌舞伎町と池袋の一部ぐらいだろうが、これをものの

数に入れるのは筋違いだろう。

ウ立ち込める中、 丑三つ時になっても、なお知性がバテずに、へっちゃらで、煙草の煙がモウモ 東大の哲学科の青年たちも夜になればグッスリ寝ているヨ、と言える。

「なんだと、表出るか」 「お前は結局へーゲルを読めてないんだよ」

「やめろよつまらん、近所迷惑だろ。それよりこのポスターのデザイン見ろ

こんなことでいいのだろうか、いいわけがない。 みたいなことをやりあっているという、活性化の景色はすでに無いのだ。 「お前はたまには手ェ洗えよ、バケモンみてえだぞ」

思うが、僕は「おいおっさん、寝るなよ」と言われたとき、 つきあいすることがきっとできるだろう。 心うが、僕は「おいおっさん、寝るなよ」と言われたとき、最後まで眠らずにおこれだけ好き勝手なことを言えば、言った者の責任というのがある程度あると

負でいるわけではないので、僕のようなものは、若い人間にとってはあっさり蹴を来、老人といえば僕のほうが老人だし、僕は「何かをやっている」という自 散らす対象でなくてはならない。 それどころか、そちらが先にお眠りになっちゃうんじゃないかな、坊ちゃん。

られていることだろう。 れて、「すまん、勘弁してくれ……」と弱音を吐かされるべきなのだ。 僕のようなジジイは、何かをやっている若い人間には、追い付けず、引き離さ そのとき僕は、「ヘタレめ」と言われて足蹴にされたって、おとなしくいたぶ

そういった光景に、まみえることに、ずっと憧れているのだ。

人間が、夜に寝るわけがないということを、そろそろ思い出してもらえただろ

\* \* \*

「行道は頭燃を救う」という言葉がある。

禅師・道元の記した「学道用心集」の冒頭部分に書かれている

ない」という意味だ。 これは、「フラフラになるまでやるしか、人間が頭でっかちでなくなる方法は

味が違うのだ。 「行道は頭燃を救う」と書いてあるのだから、書いてあるそのままの意味だ。 と、下衆みたいな解釈をしたが、こういうものは本来翻訳するものではない オセロを三時間するのと、フラフラのエヘラエヘラになるまでやるのでは、

三時間では頭燃は救われない、と書いてある。

と書いてある。 ば、少しはヘトヘトになってエヘラエヘラで、ちょっとは頭燃が救われるかな、 手品の練習も、鏡の前で十時間立ち尽くして、一秒も気が逸れずにやり続け

そして、頭燃が救われるので、しんどくないのだ。

燃によってしんどいのだ。 先ほど述べた、〈何もやっていない人こそが、しんどい様子〉〉というのは、 頭

誰も感じないだろう。
よもや、三十分で「ふう」と一息ついてしまう人間のそれを、 「行道」だとは

三十分で「ふう」と一息つく人は、頭燃が救われていない

めるのだ。 だから、三十分で「ふう」の人は、頭燃の表れとして、滔々とご感想を述べ始

「行」をやらせ続けるしかない。 人間が頭燃を救われるには、頭燃をする余裕がなくなるまで、 何か具体的な

をやらせるものだ。 座禅などは、「とにかくキッチリ座ってろ、ブレたらシバくぞ」という「行

を「修行」という。 議論をやめさせ、とにかくそういった「行」を先に修めさせるので、そのこと

ソッドなのだ。 く、その「何のため?」とかいう思念・頭燃を起こす余裕をなくさせるためのメ 行を修めるということ、修行をするということは、何のためということではな

ので、ザコがあれこれ考えるべきではない) 頭燃がなくなればどうなるか? (なぜそういうメソッドが発明されているかは、 過去の天才たちの英知による

そんなことは、お楽しみにとっておけばいい。

新規追加する必要はない。 |燃がなくなれば、ステキなことになりますよ、などという、さらなる頭燃を

えずやっちゃえば?」ということで成立している。 とにかく、人間は行に放りこめば、強制的に頭燃から救われるので、 「とりあ

「三昧」という。仏教世界ではサンマイと読む。 行に放りこまれ、それ以外のことはする余地も与えられないという状態を

まあそんなことは、どうでもよいことで、ちゃんとしたことは専門家にまかせ

けっして親しく口を利かないだろう。 「最近、座禅に目覚めました」などと言う人があったら、 僕はそういう人とは、

心の中で純粋に「Fuck」としか思っていない。 何度も言うように、感想はゴミなのだ。誰かがご感想を述べ始めたとき、 僕は

ていないときは意味がない。ゴミだ。 座禅とか、そういった「行」というのは、やっている間は意味があるが、 やっ

していますということだから、メインとしてはゴミだ。 座禅をしている一時間だけは、尊崇する。たとえそれがどんな人間であっても 一日に一時間、座禅をしますという人は、残りの二十三時間をゴミとして過ご

その他の時間は、近寄るなゴミめ、としか思わない。

る最中はともかく、その他の時間はゴミだ。 僕だって、こうして文章を書くという行道をやっているが、こうして書いてい

かをやろうとしている。 だから、なるべくゴミにならずに済むように、 その他の時間も、 できるだけ何

やることは何でもいいのだ。

受験生が、受験勉強をするのに、休憩時間を挟む場合、僕はそいつが不合格に結果的に、ヘトヘトのエヘラエヘラになるまで、何かをやれていたらいい。

なるのを確信する。

もあるが、効率が落ちるというなら、効率を落とせばいい。 「休憩したほうが効率がいいらしい」などと、聞きかじったことを言い出す人

効率を上げようなどと、眠たいことを言っているほうが、 よほど効率が悪い の

いるし、本当はわかっているだろう。 このことは、誰だって、僕の言っていることのほうが正しいと、 本当は知って

昏睡から目覚めて、「あ」となり、ごそごそと勉強を再開する様子なら、そい 休憩を挟まず、効率を落とし、力尽きたところで昏睡する奴なら、 合格するか

つは合格すると確信する。

三昧/サンマイに入っているからだ。

脳はエヘラエヘラ状態になり、そのぶん、受け取ったものを無条件に吸い上げ

人間が何事かを身につけ、伸びる、というときは、 必ずこの状態だ。

人間はエヘラエヘラして伸びるのである。

とにしかならない。頭燃はゴオゴオだ。 頭燃が救われていない状態では、どうなるかというと、ヘトヘトで頭燃を救われている状態でしか伸びない。 頭燃に風を吹き込むこ

それで、〈〈何もやっていない人こそが、しんどい様子〉〉となる

ここに、一見すると不公平が起こるのだ。

一見、エヘラエヘラしている人が伸びていく。

いの人が、何も伸びていかないという不公平だ。 一見、ガンバっていて、切羽詰まったふうの面持ちで、 マジメさで胸がいっぱ

これは正しくみると不公平でも何でもない。

エヘラエヘラしている人は、そうして頭燃を救われるまで行道に突っ込んでい

るのだ。 ガンバっている人は、 「ガンバルぞ!」と頭燃を持つ余裕を残したままやって

いる。

そのたびに「ガンバルぞ」と巻き直して、努力している。「ガンバルぞ!」の人は、実はたいてい、三十分ごとに「ふう」と一息つき、

めている。 そして、半日がんばったら、「ふう、がんばったなあ」と感想を自分で抱きし

このことは、いいかげん真実だから、いいかげん誰でも知っていたらいい。 夜になったら寝ると思い込んでいる奴が伸びるわけがないのだ。 もう、このあたりのことで、内心の議論をするのにも、誰もが飽きただろう。

やっていないのだ。 時計を見て、「うわ!」「ウソだろ!」と、驚き笑うことのない人は、

何もやっていなければ、何も身につかず、何も伸びない、それは当たり前のこいくらしんどさが残っても、何もやっていない人は何もやっていないのである。

行動とか、筋トレぐらいしかない。 何もやらないまま身につけられることといえば、 マニュアルどおりのパターン

覚えているだろうか。 話が変わるようだが、少し前、 「マッタリする」という言い方があったのを

僕の記憶によれば、こういう使い方をした。

「もしもーし」

「もしもし。あ、お久しぶりです。どうしました\_

リしませんかい?」 「あのさあ、突然なんだけど。今日さ、どこか、焼き鳥屋でも行って、

ひ行きましょう。ぜひマッタリしましょうよ」 「あ、いいですねえ! したいですねえ、マッタリ。いいじゃないですか。ぜ

ということ。 それをやりましょうよ、という話だ。そういう使い方をした。「マッタリする」 あえて抑圧するという中にも、独特の味わいが生まれてくる。今日などは特に、 ているほうが有益で、美しく、人間的であり正しくはあるが、その逆、活性化を つまり、「あえて活性化を抑制する」というようなこと。もちろん、活性化し

あえて使われることはほとんどなくなった。 今は、活性化自体が行方不明なので、そのアンチテーゼである「マッタリ」も、

カーン」みたいなものが流行っている。マッタリという味わいさえなくした、何今は、その「マッタリ」のさらに上位というか、低位というべきなのか、「ポ か正体不明のポカーンとしたもの。

人間の活性化状態を四段階に分ければ、 次のような分類になると思われ

ゾーン / 活性化 / マッタリ / ポカーン

はいわゆる「ゾーン」に近づいていく。 人間が、「何かやっている」状態で、頭燃がほとんど消失に至るほどに、 人間

逆に、頭燃が根深く、粘っこくなっていくと、マッタリの底を破り、ポカーン

たぶん、頭燃によって、脳みそが焼野原になるのだろう。

だんだんと、説明が面倒になってきたぞ。

な目になっていく。僕はならないが、僕のことを要素に入れても何の意味もないたとえば、人は通勤で満員電車に乗っているとき、どうしても魚の死んだよう

その顔面と気配がヤバイ、と誰でも見たことがあるはずだ。「ポカーン」とはそ 電車内で顔面をグリングリン化粧しているところを見かける。化粧はともかく、 魚の死んだような目は、いわば「マッタリ」に含まれていると見ていい。 方、最近では、ものすごい顔をしたおねえちゃんが、ものすごい顔のまま、

脳が「ポカーン」として、その機能を喪失していることが、 電車内で顔面をグリングリン化粧しているおねえちゃんは、全体の印象として、 誰にでも見て取れる

の状態のことを指している。

だから単純に言って「見てて何かコワイ」。声を掛ければ、何か猛烈に汚い声が 鏡止水である、とは思えない。頭燃は何か、粘っこく激しいような印象を受ける。 返ってきそうだという予感がある。 そして、ポカーンとしているが、その頭燃はどうだろうか。頭燃は、静寂で明

「パパがさあ、ママのこと殴るからさあ」

カーンとしており、見るからに「あかん、どうしようもない」という直感がある。 としているので、それを「ポカーン」と呼ぶことにしている。 と、顔面をグリングリンしながら、ケータイで大声で話している。脳みそはポ 当人に罪はなく、別に善悪の問題ではないのだろうが、とにかく「ポカーン」

(それ見ろ、説明が完全にアホみたいになった)

んどそうだ。 そして、ご存知のとおり、「ポカーン」の人は、何かとにかくダルそうで、

わいいか、というあたりの話題しか受理できなくなっている。 世の中にはいろんな人がいるものなので、僕はそういう人間模様に、 「活性化」など、冥王星より遠い話で、彼女らの脳はすでに、 どのネイルがか 文句をつ

かれ続ければ、ポカーンとなってしまうよりしょうがなかったのかもしれない。 けているわけではない。ただ分類の話をしている。 子供の頃から、パパがママを殴るという光景、そこに起こる頭燃の苦しさに焼

ので、ママを殴るようになったのだろう。 彼女のパパはおそらく、仕事がなくて、毎日ヒマであり、 やることがなかった

るのである。 「行道は頭燃を救う」わけだから、行道が無ければ、頭燃は好き放題に燃え盛

になっていたら、その夜パパはママを殴らなかっただろう。 パパがもし、十五時間ぶっ続けでオセロゲームをし、フラフラのエヘラエヘラ 行き場のない頭燃が、理不尽で投げやりな暴力という方向に噴き出した。

頭燃が救われているからだ。

がない。 ヘトヘトのエヘラエヘラの人間が、怒号を上げて女性をブン殴ったりするわけ

ニックの練習をしていたら、十時間後にはその伸ばした爪を切ってしまうだろう。 顔面グリングリンの彼女だって、十時間も鏡の前に立ったまま、 「カードをやるのに邪魔なの」 カードテク

といって、パチンパチンと爪を切り始めるはずだ。

と娘は、何でもない和合の酒を、楽しく呑むことができるかもしれない。 こうして、オセロの父とカードの娘が、ともにエヘラエヘラになったなら、

父

「パパ、オセロめっちゃやってんじゃん」

父は、娘に、「お前、大学行くか」と言うかもしれない。「お前こそ、あれ何だ、トランプか、めっちゃやってるじゃないか 「行道は頭燃を救う」というのはそういう意味だ。

やっているな」と見るからにわかる光景を目撃し、それを邪魔しないように僕は ヤッてしまうことではなくて、居酒屋で呑みかわす父と娘が活性化して、「何か 僕があこがれるのは、家庭不和に浮かされたポカーンとした女を言いくるめて

隅っこに追いやられて狭苦しいお酒を呑むことだ。 そして、隅っこで、声を小さくし、友人とクソ話をえんえんやりあうのである。 人間が、夜に寝るわけがないということが、いよいよ思い出されただろうか?

「行」ということの、面白い性質がある。

これはきっと、 極めて重要な話なので、耳の穴をかっぽじって聞くべき価値が

もし、Aという行がAのみを獲得するのならば、座禅をする僧侶は、 Aという行を積んだとき、Aが獲得されるとは限らないのだ。

腰痛を獲得しなくてはならない。 そんなことはなく、座禅によって菩提心を得うる(らしい)から、 禅僧は座禅 ひたすら

をしているはず。

ことは、「何を獲得するかはわからない」ということなのだ。 Aという「行」が、Aの獲得につながらないということ、のみならず、 重要な

その不明のXが何でありうるかを知っているのは、それをすでに獲得済みの先 Aの行を積んだとき、獲得されるのは、不明のXだと捉えたほうが正しい。

が「師匠」として付き添ってくれるほうがよいのだ。 だから本来は、何事につけ、修行には先人がいてくれるほうがよく、その先人

わかりやすく、典型的な例を示しておこう。

たとえば、バイオリンをやっている人は、歌が上手くなることがとても多い。 一方、ピアノをやっている人は、別に歌が上手くなるという副作用はない。

なるのか。 なぜ、「歌」という行は直接やっていないのに、バイオリニストは歌が上手く このことには、眼球をグリグリに開いて注目する価値がある。

ればいいのに、なぜピアニストにはその恩恵がなく、バイオリニストにだけその次に、「楽器をやっていたから」と言うなら、ピアニストだって歌が上手くな 恩恵があるのか。

逆のように見える例もある。

うなものだ。 撃フォームのコントロールが必要なのだから、野球選手はゴルフも上手になりそ 野球もゴルフも、球を狙って棒でひっぱたくスポーツであり、どちらもその打たとえば、野球選手は、決まってゴルフが上手にならない。

一方、アイスホッケーの選手は、当然ながら、初めてのゴルフでもまっすぐにだが、野球選手がゴルフ下手というのは「お決まり」のパターンだ。

なぜこのような違いが生じてくるか?

ボールを打つことがあっさりできるのである。

ボディがそれを反響して音色にする。人体の発声機構も、 の機構が、人体の発声機構によく似ているからだ。弦を振動させて原音を出し、 たとえば、バイオリンの場合、おそらくバイオリン等の弦楽器の、楽器として 咽頭原音を鼻腔に響か

せて音色にするというような仕組みになる。

染みて感覚でわかっているので、自分の体も楽器化するときに、それがしやす のだ。前もってコツを掴んでいるといえる。 その、原音を出すということ、および反響して音色になるということが、身に

ピアニストの中には、歌が苦手だという人も多いし、声が固くなる人が多い。 奏する」ということが、人体の発声機構ではやりづらく感じることがあるわけだ。 いう機構は、人体の発声機構とあまり似通わない。だから、「音色を出す」「演 一方、ピアノのほうは、打鍵によって音を出す。ショットによって音を出すと

ながらない、ということが起こってくる。 こうして、弦楽器の行は歌の獲得につながり、鍵盤楽器の行は歌の獲得にはつ

彼女は、歌を習いたいが、近くに歌のスクールはなく、近くにはピアノとバイ ここに、「歌」について、いわゆる「意識が高い」人がいたとしよう。

オリンのスクールしかない。 彼女は、

「色々考えたけど、わたしはやっぱり歌でやっていきたいから。歌を自分なり

遠くに歌を習いにいけたらいいわね」 に考えて、やっていくことにするわ。あとはなんとかしてお金をためて、どこか

と発想する。

「わし、アホでんねーん」

という男がいたとしよう。

彼はアホであり、歌に興味なんか持っていない。

たら、何も考えずにそれをやりだす。 ただ、アホなので、やれと言われたことをそのままやるし、 いったんやりだし

イオリンとピアノの両方を習いだした。 彼は、「何か知らんけど」、ほとんど目についたからというだけの理由で、バ

に言わはるよってに」 「バイオリンにもピアノにも、 別に興味なんかおまへん。 先生がキツう

になるのは、後者のアホのほうだ。 こうして、「意識の高い人」と、 と、何か知らないが、とにかく言われたとおりのことをえんえんしつこくやる 「アホ」を比較したとき、結果的に歌が上手

アホのほうが「行」を積むからだ。

意識の高い人は行を積むのが遅れる。

ますますアホのほうが行を積みやすい。 アホのほうが頭燃が弱く、意識の高い人は意識の高さぶんだけ頭燃も強いから、

ここに、一人の先人が現れたとしよう。

これを受けて、意識の高い人は、 先人は、「歌を上手くなるために、バイオリンを習ったほうがいい」と言う。

「うーん、そういう考え方もあるか。自分なりに、検討してみます。アドバイ

スありがとうございます」

方、アホは、

「そうなんでっか。ホナそうしまっさ師匠

こうして、結果的に、アホがアホのまま、興味もなかった歌が上手くなる、と と言い、ピアノを引退してバイオリン一本に絞る。

注目すべきは、アホの側が、とにかく何かしら「行」を積んでいるということ意識の高い人は、何も獲得しませんでした、という結果が残る。

「行」を積むということの面白い性質は、 〈〈興味がなくても獲得してしまう〉〉

ということだ。 歌への興味とか、歌への高い意識とか、歌への熱い思いとか、そういったこと

は、あってもいいし無くてもいいが、そのことの「獲得」には何ら寄与しないの

「高い意識」も、たいてい行の邪魔になるし、熱い思いも、たいてい行の邪魔それどころか、物事への「興味」は、たいてい行の邪魔になる。

歌が上手くなったアホに、「なぜ歌がそんなに上手くなったのか」と訊いても、 「それが、知りまへんねん」

とアホは答える。

獲得したのではないから。 彼は別に歌が上手くなりたくて上手くなったのではないし、 歌を目指して歌を

合っていたときがある。

〈<人間の埋まっている能を掘り起こすのは「行」なのだ>>。

そして、掘れば、何かしらが掘り起こせるのであって、 熱い思いとか高い意識では掘り起こせない。 掘り起こされるものは掘り起こされるのだ。 別に目を閉じて掘って

何が掘り起こされるのかはわからない。

どの行で掘れば何が掘り起こされるのかは、それぞれそのことの師匠に教えて

この法則に逸脱するのが、試験勉強やスポーツだ。

試験勉強のことを修行とは言わないし、スポーツのトレーニングを修行とは言

試験勉強やスポーツと、芸事などの人間営為と、何が違うか。

ルールが決められてあるところだ。 それは、試験勉強やスポーツは、「これができれば得点です」と、 前もって

定められていない。 バイオリンが「上手い」とか、歌が「上手い」とかいうのは、 何が得点なのか

試験勉強やスポーツは、この数式が解ければ○点です、三回転ジャンプができ

れば〇点です、ということが、協議会によってルール化され、定められている。 ングができるのだ。 こうして、得点のルールが定められていれば、それに向けて科学的なトレーニ

るが、歌が「上手い」とかいった芸事のことは、努力がまったく比例して報われ誰でも知るように、試験勉強やスポーツは、努力があるていど比例的に報われ科学的なトレーニングとは、Aに向けてAの努力ができるということだ。

したトレーニングができないからなのだ。それは、芸事はルール化した得点制ではないため、 科学的にターゲットを限定

象たりえない。 「民謡を粋に歌え」みたいなことは、ターゲットを限定したトレーニングの対

「行」のえげつないところは、 民謡を歌いまくっても、

ないというところだ。 別に民謡が上手くなら

カラオケ教室に通っても、やっぱり歌が上手にはならないという話と同じだ。 それどころか、ぜんぜん関係のない、相撲取りがやたらに歌がうまかったりす カラオケ好きのおばさんが、カラオケに行きたおし、ヴォイストレーニングと

土に鍬を打ち続けるという「行」をえんえん積み重ねてきたからだ。酔っ払った農家のおじさんが、なぜかいきなり民謡が上手だったりする。相撲部屋で何かしらの「行」を常に積んでいるからだ。 僕自身、学生のころ、夜中に部室にたむろって、えんえん、アホの極北を言い

というような時間だった。 怯えている(怯えているのにテスト勉強をするという発想はすでに失っている) 将来アメリカ行くし」と言い放ち、言い放つだけで、翌日のフランス語の試験に アルバイトの面接に行くだけでブルって震えるありさまで、勢いだけで「まあ

る!」と盛り上がったのだが、実際に海に出ると海は巨大で、しかも大シケで、 うような、何をしているかわけのわからない時間だ。 きないか?」と言い出し、加工すると意外にそれっぽいのができたので「いけ 装置は一瞬で波にさらわれていった、終わった、われわれは海水に濡れた、とい ダイエーの買い物カゴを拾ってきて、「これを加工して海の魚を獲る装置にで

になっていた。 だがそうして、アホの極北をやりつづけるというのも、

それが今、何の獲得になっているのかは知らない。アホくさくて知りたくもな

あのアホの極北が、何かしらの「行」になっていたと今さら思うのは、 でも、不覚にも、何かの獲得にはきっとなっているのだろう。

でアホも極まっていると、頭燃なんか起こらないからだ。 人間、夜になったら寝るでしょ、というのは、あのときダイエーの買い物カゴ

を夜な夜な加工していた僕たちに対する誹謗だ。

アホの極北に比べたら、寝たほうがマシかもしれないが、すくなくともあのと 人間が夜に寝るわけがなかった。

をやっていたのだろう。 何やってんの、と呆れて訊きたくなるぐらいだから、それは逆に、やはり何か

\*\*\*

身はどこかへトへトになっている。そのヘトヘトが、何かをやっている人、およ び行を積んでいるさなかの人に近い。 深い夢を見て目覚めたとき、「ああ、夢だったか……」という嘆息と共に、心

フラフラで部屋から出てきた人には、いいねえ、という希望を覚える。 イプの人は、僕は大の苦手だが、「『罪と罰』を三日間ぶっとおしで読んだ」と「読書が趣味です、という人には何も思わないし、いわゆる本の虫と呼ばれるタ

入ってから飲み会における常識の修正にかなり苦労した。 僕が過去に「行くときは行くとこまで行かんかい」と仕込んだ後輩は、 会社に

という、マジの確認メールが来たことがある。 「飲み会って、泥酔しなくていいんですか」

手や新人などをぶっちぎって最速で泥酔する。 か治らず、今でも油断すると飲み会で泥酔しかねない。彼はすでに中堅だが、若 泥酔しなくていいんだと、改めて知った彼だが、それでもクセや習慣はなかな

力などが、常識から逸脱してしまうことがある。今ふうに言うと、スペックが落人間は、ヘトヘトのエヘラエヘラになると、いくつかの能力が落ちる。判断能

ちる、というほうがわかりやすいかもしれない。 そのときはどうぞ、スペックを落とせばいい。

たとき、友人から電話がかかってきて、なぜだかはわからないが第一声、 或る日のことだ。僕は、そのヘトヘトのエヘラエヘラのとき、それも極限だっ

と電話に出たことがある。まったく意味がわからない。 「ホステス!」 しかも電話の相手は男

それで、混乱をとりつくろおうとして、言葉をつづけ、 ホステス、と言った直後、何がホステスなんだ? と自分でも混乱した

「その、九州の、龍が如く。

なぜかプレステのゲームタイトルを断言した。 「九州の」は完全に関係な

スペックが落ちているのだ。

ぜか知らないが、とにかく何かを言おうとすると、そうして意味不明の単語がバそれが、意味不明でおかしい、ということは、言った直後にわかるのだが、な カスカ飛び出る状態だったのだ。

こういうとき、当然だが、自動車の運転はしてはいけない

いほうがいい。 ガスコンロやストーブも操作しないほうがいいだろう。銀行の口座もいじらな

が、その他のことは特に問題ない。

電話口の友人も、

(この人にはこういうことはよくある)

という具合だったので、別に驚きはしなかったそうだ。

なぜそんなにヘトヘトのエヘラエヘラになっていたのか?

ことがあって、ヘトヘトになっていた。 その実情は、あまり人に話せるようなことではなかったのだが、とても素敵な

この、「ホステス! その、九州の、龍が如く。」というような状態で、そして、素敵なことに加えて、あとは単純に、寝ていなかったからだ。

が頭燃を持つことができるか。

できるわけがない。

いる。いいうと、到底自分の心とは思えないような、猛烈なイマジネールの嵐が起こっていうと、到底自分の心とは思えないような、猛烈なイマジネールの嵐が起こって このヘトヘトのエヘラエヘラのとき、心の中はどういう具合か、その心境はと

想像力のフィルムに映り込むイルミネーションの嵐

嵐が起こっているから、まともなことも言えなくなっていたのだ。

人格の根底レベルで大改造が行われている。

ないなと感じる。 ああして膨大な嵐が起こる以上、人間の心というのは、 自分単独の持ち物では

僕が単独で空想できる量などをはるかに超えて、そのとき嵐は吹き荒れるから

人間が夜に寝るわけがない。

別に、睡眠不足を推奨しているわけではない

が、僕はとにかく、 あこがれ続けている。

活性化の夜に。

数万の、数十万の、若さある人間が、当然のように一夜にあり

<< 人間が夜に寝るわけがない>>

と、言うまでもなく共有している。

カードマジックを披露している。 パパはセンター街の路上で賭けオセロをする、娘はボディコン姿で覚えたての

ある者はポスターのデザインに憑依し、デカルトを読めなかった初学者は片思

人間

いの性欲に破裂しそうに突っ伏している。

みんなヘトヘトで、みんな口腔粘膜がジンジンしびれている。 夜の街、その一画はヘイブンと化し、頭燃はこれまでの日々で入念に取り払わ

る準備をするのか。 しないだろう。

そんな夜に邂逅したときでも、あなたは夜の十一時には、

「そろそろね」と寝

そのとき、人間の心というのは、誰にとっても、自分単独の持ち物ではない。

あなたも同罪だ。 だから、あこがれているのは僕だけではない。

人間が夜に寝るわけがない。 人間が夜に寝るものだったら、あなたは永遠に恋人を見つけられないだろう。 「この人といて、夜に寝られるわけがない」と、確信するのがあなたの恋人な

というわけで、そんな世間話でした、 [人間が夜に寝るわけがない/了] おやすみなさい。

# 現実にならなり

夢は

## 存在しなり

僕は自分が好かれるとは思わない。

嫌われるとも思っていない。

予測を立てるには一般論と時間軸が必要だ。

僕はその両方を持っていないので、好かれる(だろう)・嫌われる(だろう)

という、予測そのものが立てられない。

昨日正しいことを今日やるわけにいかない。

かといって、今日正しいことを今日やるわけにもいかない

そいつは、ずっと新品だ。いついかなるときに手元にしても新品だ。 昨日とか今日とか明日とかに、流されずにあり続ける正しさでやるしかない。 ずっと正しいことをやるしかない。

古くなりっこないもので、古くなりうるのは時間軸に引きずられるものだけだ。 何も変わらんから新品のままだ。

そうして普遍的に正しいものは何か。

い、探さなくたってずっとあるから「普遍的」なんだ。 それが普遍的に、正しいものとして、普遍的にずっとあるなら、探さなくてい

普遍的に正しいもの、本当に正しいものは、正しさの審査を受ける前に、すで

審査によって疑われるものは普遍的ではない。

正しいかどうか審査する、その審査よりも正しいので正しい

何かを「信じる」ということがある。恋あいなら恋あいを信じたっていいだろ 正しいかどうかを問われる前から正しいのだ。

そして、「信じる」というのは、結果に裏切られたって構わないのだ。

じゃない、「アテにしていた」んだ。 結果に裏切られたら、信じるのをやめるというのでは、それは信じていたの 恋あいにおいて信じられる、普遍的な正しいことというのは、そんなにややこ

しいことじゃない。 まず、かわいい女性に出会えるということ

そして、そうしてかわいい女性に出会えるということ自体が、 胸を打つという

なら、何のためでもいいし、胸が高鳴る夢は無数にあっていいし、その中に恋あ 別に人は恋あいのためのみに生きるわけではないだろうが、何かのためという これがたまらなくいいのだ。胸が高鳴る。今日も明日もある「夢」なのだ。

いることを僕はしないし、この仮想を用いる人は誰一人いないだろう。 いが入っていてもまったく構わない。 もちろん、もう一つのやり方があることは、仮想できるけれど、この仮想を用

予測を「アテにする」というやり方だ。 いわゆる「現実問題」というようなものを仮想して、そこに予測を立て、その

と、平均分布化した予測を立てるというやり方だ。 今日と明日は、それなりに良いこともあり、それなりに悪いこともあるだろう、

ということが予測される。 その予測の中で、確率論的には、今日と明日はこれという恋愛はないであろう、

予測をアテにする。

この予測は、確率上かなりアテにできる。

アテにできる予測があれば、不利益を回避することができ、そのぶん利益を保

このやり方は実にもっともらしく見えるものだ。 比較対照として、

・「信じる」、そして結果に裏切られる

・「予測する」、そして結果に整合する

ように思える。 という二者を並べたとき、後者のほうが優れて、 メリットがあり、利益がある

その判断は間違っていない。

が、僕が捉えているのはそのところじゃない。

利益を求めていなければどうだ。そのごもっともな判断とやらは、この「もっともらしい」判断を転覆させるのは簡単なことだ。 足場を失っ

てすっころぶだけだ。

なぜ優れたほう、メリットのあるほうを選ばねばならない? 比較対照して、なぜ利益のあるほうを選ばねばならない? 「どちらでも自由に選べ」ということなら、メリットを無視して選ぶ権利があ

思える、が、それは勝手に「アテにする」ということへ数直線のプラスを取って 「信じる」、そして結果に裏切られる、ということがあったとき、マイナスに 「メリットのあるほうを判断して選べ」と言われたわけではないのだから。

いたから、マイナスに思えるだけだ。 五段階の通知簿では、1が劣等で5が優秀ということになっているが、 単に1

という数字が好きなら、先生に頼んで1を並べてもらっても構わない。 通知簿によって、 成績が評価されるとして、低く評価されたら悪い、とは決

思い込みだ。

でまだ熱いアスファルトに「5」の評価をつけよう。 よかろう、では僕が、折れ曲がったトランプに「1」の評価をつけ、 打ちたて

土星の輪の間にあるカッシーニの隙間には「3」の評価をつけた。

それでどうなる?

どうなるか説明してみてくれ

トランプは、何か開き直ったりするのか。 アスファルトに負けた土星の輪の隙間は、 ガックリ落ち込んで、 折 れ曲がった

に整合する人に「2」の評定をつけよう。 恋あいを信じて裏切られる人に「4」の評定を、そして「予測」を立てて結果

何になる?

折れ曲がったトランプから、熱いままのアスファルトに至るまで、それはただ

実相として実在しているのみだ。

在だ。本当にそれだけだ。 別に、それぞれの、何がどうだ、ということは特にない。 ただ実相であり、

るに過ぎない。 この話は、立場上、わかりやすくするために、仮に遠回しなところを書いてい

いない。 にいるとか、そういうやり方をする人があるとか、そんなことを念頭に置いては 僕自身は、その「予測を立てて、結果に整合する人」というような人が、本当

予測を、まず僕が立てられない。 僕自身、予測を立てないのだから、 「予測を立てる人がいるだろうな」という

れている。恋あいのことを信じている。 僕は割と、何でもかんでも信じるたちなので、その中に、恋あいのことも含ま

それによって、僕は毎日が好きだ。

すばらしいものにしている。 胸が高鳴り、たまらなくなる。毎日、今日も明日もある「夢」が、 僕の毎日を

たためしはない。 それは、理論上可能だが、幸いなことに、僕はそちらを「信じる」ことへ傾い もちろん、逆方向には、悪いほうへ「信じる」ということも理論上可能だ。

信じ、不幸や悪魔を信じることを選ばなかったのかは、僕自身にはわからない。 僕は僕の意思によらず、勝手に自動的に信じているので、とりあえず、 「信じる」ということは、自分では選べないので、なぜ僕がたとえば恋あいを 何事に

も苦しまずには済んだ。これは、ただの幸運ということかもしれない。

わけで、もし確率演算に依存するなら、どう考えたって宝くじを買う理由はない。 これは僕だけでなく、宝くじを買う人は、必ず当選すると思っているから買う 期待値では赤字になるに決まっているのだ。 僕は、宝くじを買わないが、宝くじを買えば、必ず当選するだろう。

もし僕が宝くじを買って、当選しなかったとしたら、それは僕がハズしたので

てしまったのだろう。そういうことはよくあるので仕方がない。 はなくて、向こうが何かでハズしたのだ。宝くじの仕組みはよく知らない 僕のほうは当たっているのに、向こうの側が、何かうまくいかなくて、ハズし

うの事情があるものだ。 何も、この世界は僕の都合だけで出来ているわけではないし、向こうには向こ

僕は寝る前、 夢を見てから寝るし、朝起きたらまず、何をするかといえば夢を

寝る前は、胸の高鳴る明日の夢があり、起床直後は、胸の高鳴る今見ようと思って見ているわけではないが、自動的にそうなっている。 胸の高鳴る今日の夢があ

想像がつくけれど、そうしてわざわざ自分を病気にしたいとは思えない。 の立て方や、それをアテにした上での、考えのまとめ方とかも、 やり方は

アテになる予測を立てることはそんなに大事だろうか。

くなった」というようなことは、誰にも自慢できない。 予測を立てて、「ほら今日も予測どおりつまらなかったぞ、気分もしっかり悪

によって、僕の目の前にいる人は、必ず僕の影響を受けて、即座に僕の友人にな そんなつまらないことをする人がいるはずはないし、少なくとも、僕は僕の力

うして自分の見る夢のすべてを信じることしかできない。 自動的に、そう夢を見ることになっているので、僕は予測を立てない以上、 そ

「夢のようにはいかないだろう」と言い出せば、それは「予測」なの

だからどうやっても、 信じよう、と努力する意識のすべては欺瞞でしかない。 今日や明日は不幸で憂鬱だと、強引に信じることは僕に

は不可能だ。 恋あいとは何だろう、と、僕もときどき考えることがある。

日と今日とに現実になるということだけだ。 恋あいとは何か、といっても、毎日寝る前と朝起きたときに見る夢、これが明

現実にならないことを夢とは言わない。

夢が現実にならない可能性や、その方法について考えてみた。

ないなどという可能性や方法は、論理上ありえないことがわかった。 が、それが今日と明日の現実になるものを、夢と呼ぶのだから、夢を現実にし

これは何が起こっているのだろう?

嫌われるだろうという予測も立ててはいない。 冒頭に話したとおり、僕は人に好かれるだろうという予測は立てていないし、

イメージはまったくない。 予測をなんら立てていないのだから、この先に、どういうことがありうるかの

よって色付けされている。 よって、今日も明日も、 未知なのだが、未知というのはゼロではなくて、夢に

> 人間には、未知に、それを未知としたまま「干渉」できる何かの力があるのか 未知だから夢であり、未知に向けて起こる「それ」を夢というのだ。

とも思うが、途端にオカルトっぽくなるのでやめよう。

向けて夢を覚えることなどできないはずだ。 別にオカルトにしなくても、未知が本当に真実のゼロであれば、 人間はそれに

から、その時点で未知はゼロでなくなってしまう。 仮に、未知を「ゼロ」だとしても、人間はそこに夢を持ち抱えて突入するのだ

取っていたとしても、少年が夢と共にスコップを持参してしまえば、 たとえば、自然の砂浜がどれだけ空(くう)であり、意味ゼロの無意味を気 そのときす

でに意味ゼロを気取ってはいられなくなるようにだ。 少年のスコップが砂浜を遊び場にしてしまうだろう。

で来ないといけない。 もし砂浜が真に空であり意味ゼロの自然物であるなら、 少年は手ぶらで無関心

だが残念ながら人間はそんなに甘いものではないよ。

恋あいとは何なのか、という疑問には、結局僕も自答できない

かできない、そう決められているということだ。 ただ言えるのは、僕は夢を見るし、予測を立てない以上は、夢を信じることし

入っているよ、ということだ。 そして、その見てしまう夢、信じることしかできない夢の中に、 恋あいの夢も

寝る前に明日の夢、朝起きたときに今日の夢を見る。

その中に、恋あいの夢が入っている、自動的にだ。

明日と今日をすばらしくする。 そして、その恋あいの夢は、独特の甘やかさと、 胸の高鳴りをもって、 特別に

恋あいとは、未知に向けて起こる夢だ。

現実にならない夢は存在しない。

だから、せいぜい言いうるのは、 「恋あいがあるから、 恋あいの夢を見る」と

いうことなのだろう。 僕が毎日恋あいの夢を見ているとき、主格は僕ではなく恋あいのほうなのだ。

実相として実在し、その実相主体の意思の先端が僕をぶらさげているだけなのだ。 僕は主格ではないので、何もしていない。 僕が存在して、僕が恋あいの夢を見ているのではなくて、恋あいという事象が

何もしていないことによって、予測も立てていない。

予測を立てていないとき、「未知」へ向けて、何が起こっているか? ふつう、予測を立てなければ、 未知へ向けて得られるものは、 「ゼロ」 だと思

なのだ。 われている。 だが実際には、 予測を立てないとき、 未知へ向けて得られるものは

このことが、あまりにも思いがけないことなので、 説明すれば説明するほど見

失われる、そういう具合に、この話はなっている。 [現実にならない夢は存在しない/了]

### 総理大臣って、 つまり何?

女の子が、知能を高めていく姿が好きだ。

でもいい。 男は、まあ気分は悪くないが、オスなので、あまり興味がないというか、どう

「ねえねえ、総理大臣のことなんだけど」

「こないだ話してくれたこと、ようやくわかったのよ。ねえ聞いて」 「なんだよ」

「日本は『法治国家』じゃない? 法によって国を治めるのだから、法律が大

事になるのよね」

うん

「それで、法律の中で、最上位にある法律が、憲法なの」

「そうだそうだ」

権分立、ということも書いてある」 「憲法の、第一条には、国民主権って書いてある。それで、他の条項には、

「書いてあるね」

「だから、日本は、

『三権分立で、国民主権が実現されている国』でないとい

けないのよね」

「そうだ、そのとおり」

まだ、選挙権ないけれど」 「三権分立のうち、立法は、わたしたちが選挙で議員を選んでいる。わたしは

うん」

選出するのよね。それで、選ばれた代表が、法律を作る仕事をする。代表たちの で会議ができればいいのだけれど、一億人で会議はできないから、国民の代表を

「立法府の、国会議員は、そうやって選挙で選ばれている。本当は、国民全員

ーそうそう」

多数決で決めていくようにする」

「三権分立のうち、司法は、信任・不信任だっけ。最高裁裁判官の。 選挙のと

き、やっぱり投票するのよね」 「うん。国民選挙のとき、○×をつける形で審査しているよ

「そして行政には、大臣を送り込んでいる」

「行政は、実務の仕事だから、シロウトの寄せ集めでは仕事ができない」

三

この行政が、勝手に橋や教科書を作ったら、それは国民主権にならないのよね」 ことができるプロ集団だから、シロウトの寄せ集めでは仕事にならない。ただし、 「そうだね」 「行政は、たとえば大きな橋を作るとか、教科書と学校を作るとか、そういう

行政にも国民の意思が反映され、ここにも国民主権が成立している、と」 臣にあるのよね。それで、大臣は国会議員で、選挙で選ばれた国民の代表だから、 られていない。事務次官だけでは行政を動かせない。最終的な意思決定権は、大 「そのとおり。ただ、大臣になるのは、必ずしも国会議員とは限らないけど 「それで、行政はプロ集団でありながら、その意思決定権は行政自体には与え

「そうなの?」

のある人なら、外部の人でも大臣に任命していいんだ」 「そうなんだ」 「過半数は国会議員からの選出だけれど。一応、その他の、 公務員になる資格

いわけで、別に現職の議員じゃなくても大臣はできるだろう」 しなかったとか、あるいは、『元』国会議員とかね。それでも十分政治には詳し「いわゆる、民間人閣僚というやつだね。まあ実際には、先の選挙には立候補 「あ、なるほど」

の総裁を大蔵大臣にするとかだな」 より実務レベルに精通しているわけじゃない。人脈も含めてね。あとは、元日銀 つまり、元外務省の官僚を、外務大臣にするとかだよ。そしたら、その大臣は誰 「あとは、実務レベルでさ、行政のことをよく知っている人を大臣にするとか

リットもある」 「そうか、そういう場合、別に国会議員じゃなくても大臣にしていいんだ。メ

命するのが……」 「そう。それで、その政治の一番肝心なところだね。その『大臣』を選んで任

「総理大臣というわけね」

「そう、だから、内閣総理大臣」

「『内閣』は、大臣たちの集まりのことよね」

「そっか。じゃあこうだ。国民選挙で選ばれた、国民の代表たちが、国会に集 「そうそう。だから大臣らのことを、閣僚ともいう。内閣の同僚だからな」

「うんうん」

「それで、国会の中で、さらに内閣総理大臣を、 多数決で決める」

「そうだね」

「じゃあ内閣総理大臣は、 つまり、 国民の代表たちの、さらに代表だ.

「そのとおり」

「それで、この国民の代表の代表が、大臣を誰にするか、選んで任命する権利

うことよね」 を持っているから、間接的に行政にも、国民主権が反映されていると言えるとい

ーそう」

れている、そういう国になっていますよ、ということだわ」 「それで、憲法に書いてあるとおり、三権分立で、ちゃんと国民主権が実現さ

「そういうこと。えらい勉強したなあ」

「そう? だって、ちゃんとわかりたかったんだもの」

健全で、 健気な女の子には、思いがけず知性への欲求がある

がある。 物事を、 本当に知りたがるという、知的好奇心か、あるいは好奇心以上の欲求

(男にだってあるのだろうが、考慮しない。オスは勝手に勉強しろ

女の子は、この知性の欲求によって、物事の本当のことを知りたがり、 それを

知り理解していく過程で、知能を向上させていく。 そういうとき、どうしたって健康的だから、女の子の目はまぶしく、うつくし

いものだ。 知能が未発達の段階では、たとえば総理大臣についても、こうやって説明する

しかない。 「国のことを決めている、一番偉い人のことよ」

子供に対しては、こうしか説明できない。

つまり、初等の知能は、イメージ的なものしか理解できない。

これがやがて、童女が少女になり、知能を中等に発達させていくと、本当のこ

うつくしいことだ。

とを知りたがるようになってくる。

構造が音を立てて形作られる。 く総理大臣とか、そういった断片化した情報が、知性によって一気に統合される。 学校で習った、日本国憲法とか、国民主権とか三権分立とか、テレビでよく聞

そのときには一種の感動がある。

この感動が、少女の脳をよろこばせ、よろこびが脳への滋養になるので、

は知能を発達させるのだ。 少女は中等の知能を持つようになり、もうガキんちょではなくなる。

興味を移していく。

少女は、イメージばかりの商品には次第に興味を失ってゆき、

「本当のこと」

はその後もずっと、イメージ的なものしか理解できない、という状態になる。もし、この感動と、脳への滋養、知能の発達が得られなかったとしたら、よ

たとえ何歳になろうが、総理大臣というと、 「日本で一番偉い人じゃん? そんで、絶対ウラで悪いことしてる人!

知能が初等のまま、イメージしか理解できない状態の人に、たとえば「太平洋 と、それこそ「そういうイメージ」しかない世界を生きていくことになる。

戦争」という単語を与えると、暗い感じになる。その人のタイプによっては、ヨ ヨヨと泣き崩れる流れにもなっていく。「戦争反対」と言い出す巧言令色の準備

イメージしか理解していないからだ。

らざるを得ないイメージはともかく、それよりも、 中等の知能を持つようになった少女は、「太平洋戦争」と訊くと、その暗くな

いうんでしょう」 「太平洋戦争って、つまり何があったんですか? どうして、大東亜戦争とも

ということに心が向く。

知性への欲求があるのだ。

本当のことを知りたがり、本当のことを聞きたがる。

わ、と、すでに発達した知能が嗅ぎ分けているからだ。 本当のことを知りもせず沈鬱ぶるのなら、それはイメージに浸っているだけだ

健全であり、うつくしいものだ。 いくということは、自然の理だから、その自然の理が阻害されず育っていく様は、 童女が少女となり、もう子供ではなくなっていく、そのぶん知能も発達させて そのときの少女は、どうしたって、「ぎゃはは」の人よりもうつくしい。

ので、その不健全の印象が何か胸にウッとくるのだ。 うにイメージ的なものしか理解できない状態にとどまっていると、健全ではない ただ、本来発達していくはずの知能が、どこかで発達を阻害されて、子供のよ別に、「ぎゃはは」の人が、頭が悪いからブスだ、と言っているわけではない。

的なものの理解、構造的なものの理解へと進んでいく。 その次はどうなるか。 童女は少女となり、知能は中等となって、イメージ的なだけの理解から、社会

次は、少女が一人のレディになってゆき、知能は中等から高等へ発達するだろ

今度は中等から高等へ進むにあたり、社会的なだけのものからは興味を失ってい初等から中等へ進むと、イメージ的なだけのものからは興味を失ったように、 知能が高等へ発達すると、今度はやはり、社会的なだけのものから興味を失っ

そのとき、 興味は、実存的なものへと移っていく。

彼女はもう、総理大臣を「偉い人」とは思わなくなっている。 実存とは、「人が生きるとはどういうことか」を、直覚する現象のことだ。

人」というのは理解しているが、同時に「だからといって」とも感じている。 どのような社会構造があれ、人は人であり、誰だって一個の人間だ、と感じて イメージとして、「偉い人!」とはもちろん思わないし、社会構造的に「偉い

たとえ目の前に現職の総理大臣がいたとしても、彼に自身の実存が看て取れな

いなら、そこに感動は覚えない

か、その実存には心が傾く。 一方、たとえば伊藤博文が、総理大臣を務めたことも含め、どのように生きた

を出ていた。 伊藤博文は、常から夫人に、 「生きて帰るものと思うな」と言いつけてから家

たそうだ。 だから、凶弾に斃れたときも、 夫人は訃報を知らされて、まったく驚かなかっ

テロリストに銃撃された伊藤博文は、

「三発当たった。相手は誰だ」

「おれを撃つなんてバカなやつだ」

「おれはもうダメだ、他に撃たれたやつはいるか」

「森もやられたのか……」

と、それを最期の言葉にして死んでいった。

この伊藤博文のエピソードには、 剛毅な人だったのだ。 「人が生きるとはどういうことか」を、

さにおいて直覚させる力がある。 こうして、「政治家」と呼ぶべき人がいたのだ、ということは、レディを感動

させるだろう。 その感動が、やはり脳の滋養となり、彼女の知能は中等から高等へ向上する。

いと欲求し、本当に生きるように生きている人に触れたいと欲求するのだ。 彼女は、今や本当のことを聞くだけでは物足りず、本当に生きるように生きた そのとき、彼女の眼差しは、やはりうつくしいものだ。

飛び越えて成り立つ実存の直覚実現を求めている。 彼女の知性は、社会的なもの・構造的なものへの理解を土台にして、その上に

せることは、実際とても人間的で、やはりうつくしいものだ。 のだ。知性の求めるところが、彼女に「本当に生きるように生きたい」と求めさ そうして、知能が発達し、欲求が高次化する様は、健全であり、うつくしいも

\* \* \*

(オスは知らん)

こうして、人間の知能と欲求は、段階的に進んでいく。

・初等知能は、イメージ的なものを理解できる。そしてイメージ的な刺激を欲

・中等知能は、社会的なもの・構造的なものを理解できる。そして社会的・構

・高等印能は、実写的なものを直覚できる。造的なものの、「本当のこと」を知りたがる。

うことか」、それを直覚実現することを生に求める。・高等知能は、実存的なものを直覚できる。そして、「人が生きるとはどうい

「ひら、それにして、のこ」「からあなたは、まず心当たりのオスに、自分のパートナーを考えるとき、オスのことも重要になってくるだろう。」はの子の話ばかりして、オスのことはどうでもいいのだが、たとえばあなたが

「ねえ、総理大臣って、つまり何?」

と訊いてみればいい。

そのとき、どのような答えが返ってくるか。

るか。 返ってくるか。あるいはそれに加えて、実存的なものまで含めた答えが返ってく返ってくるか。あるいはそれに加えて、実存的なものまで含めた答えが返ってこないか、あるいは社会的なものとしての答えがイメージ的な答えしか返ってこないか、あるいは社会的なものとしての答えが

公長がある。
ないようだったら、「ある程度マズイぞ」と焦りなおしておく説明が自分で出来ないようだったら、「ある程度マズイぞ」と焦りなおしておく知って、少しは尊敬を取り戻してあげるということになるかもしれない。知って、少しは尊敬を取り戻してあげるということになるかもしれない。かで、会社の構造などをよく知っており、新聞などをふつうに読んでいるタイプめで、会社の構造などをよく知っており、新聞などをふつうに読んでいるタイプめで、会社の構造などをよく知っており、新聞などをふつうに読んでいるタイプ

の知能程度に依存するかもしれないからだ。あなたの彼氏は必ずあなたと同程度ひょっとしたら、自分が誰と結ばれるか、自分が誰と友人であれるかは、自分必要がある。

「総理大臣? 日本で一番偉い人でしょ。政治家で。おれは別に、偉いとは思「この人かな」と、あなたが目星をつけている男性が、の知能です、ということになった場合、いろいろマズいことがあるに違いない。

るだろうので、慌てないことだ。 という答え方をするようなら、あなたはもう少し、彼について考える必要があ

いい。 彼と一緒に映画でも観て、その後彼がどう話すのかを、よくよく聞いてみれば 彼と一緒に映画でも観て、その後彼がどう話すのかを、よくよく聞いてみれば

たとえば映画「タイタニック」を観て、

「レオ様、超かっけえ」

ずに、ちゃんと彼のことを知っておくべきだ。 と興奮しているようなら、それを「かわいいわウフフ」とはなるべく乗せられ

彼はおそらく、映画に示された実存にまったく理解が届いておらず、イメージずに、ちゃんと彼のことを知っておくべきだ。

というか、お互いさまだが……もし、あなた自身が、その実存像に理解が届いていなければ、それはおあいこもし、あなた自身が、その実存像に理解が届いていなければ、それはおあいこも恋あいの上で生きるということは?」という、一つの実存像が示されている。映画「タイタニック」なんかは特に、「人が生きるとはどういうことか、それ的なものだけで興奮している可能性がある。

ところはまったく違うのだ。こいい」と感想や感激を漏らす場合でも、それぞれの知能程度によって意味する映画でも小説でも、歌でもアーティストでも、何でもよいのだが、同じ「かっ

について「かっこいい」と感心しているのか。社会的な構造を理解した上で、その構造上に何事かを成し遂げる、その社会性イメージ的な刺激を受けて、「かっこいい~」と興奮しているのか。

い」と感動しているのか。 実存的な直覚として、肯定せざるを得ない人間の生を受け止めて、「かっこい

ち込むようにして、自己への問いかけと考えごとに入り込む、というほうがまとだから、願わくば、映画「タイタニック」を観たあと、彼はしばらくまるで落きか、あらためて?」という問いかけが起こっているのも一つの特徴だ。それが実存的な直覚だった場合、そこには同時に、「では自分はどう生きるべ

あまり決まりきまった方程式は存在しない。といっても、単に映画というメディアに接続が薄いだけのタイプもあるので、

場合、彼の「マジ感動した」はさすがに完全にウソだ。 ただ、「マジ感動した」と言って、さあビール飲んで寝よか、とすがすがしい

どういうことかというと、知能程度がイメージしか捉えていない人がいたら、満足できるとしたら、それはあなたが相当無欲な場合に限る。

そうしてすがすがしいタイプは、別に悪いわけではないのだが、そういう人で

はやがてあなたを決定的にさびしがらせることになるだろう。それでいいじゃん、と言えるほどに、あなたが無欲でなかった場合は、その人そういう人は、あなたのこともイメージ的にしか捉えていないということだ。どういうことがというと、知能程度がイメージしか捉えていない人がいたら、

あまり言うと恐怖になるから、あまり言わない。

イメージと実存を取り違えているケースはとても多いのだ。

立ってこない。
立ってこない。
さってこない。
の熱意みたいに見えるものは、実際に生きるときにはあまり役に言わないし、その熱意みたいに見えるものは、実際に生きるときにはあまり役にイメージに強い執心がある人のことを、意志が強いとは言わないし、熱意とも

実存には及んでいない。
だが、そこでホットな気持ちになったつもりでも、それはイメージであって、だが、そこでホットな気持ちになったつもりでも、それはイメージだけで見たって、「すごい!」「かっこいい!」となる。 先ほど、伊藤博文の話をした。初代総理大臣で、加えて死にざまの話もしたの先ほど、伊藤博文の話をした。初代総理大臣で、加えて死にざまの話もしたの

与えないし、彼の明日からを新しくするということはないのだ。だから、そこで得たホットな気持ちのようなものは、彼に自己への問いかけを

そういう、イメージと実存の取り違えというのは実によくある。

恋愛なんかは特に、イメージ的な捉え方が堂々と横行している。

「あこがれの結婚生活」みたいなイメージはいくらでもあるし、

三回目のデー

こしている。これでは、「「こうこうこう」では、これでは、「こうこう」できか、全てイメージ的なものだ。 トでディズニーランドでキスとか、シティホテルの最上階ラウンジがロマンチットでディズニーランドでキスとか、シティホテルの最上階ラウンジがロマンチッ

と、思いがけず確信している人は、実は男女ともに多い。 こんなもの、もちろん実存でも何でもないが、恋愛といえば「そういうもの」

求だけ満たされればいい。 そういうとき、言わずもがなだが、別に相手は誰でもいいのだ。イメージの欲

生きるとはどういうことか」の直覚、実存にもちろんなりうる。「イメージどおりのベタなことをしようぜ!」と取り掛かっていくのも、「人がそうした、典型的なイメージを、「うーん、やりたい」と望み、一種のシャレで、「それでいいじゃん、そういうもんじゃん」という側面も確かによくわかる。

| 本当の本当こ、イメージごけしいないしごこの人は、こ後こが、本当の本当に、イメージ「だけ」というのは怖い。

もあるので、問題はそのときだ。 本当の本当に、イメージだけしかないんだこの人は、と後になって気づく場合

に気づいたとき愕然とし、致命的に寂しさを知ってしまうだろう。 そこで、それでいいじゃん別に、と言い切れない場合は、いつの日かそのこと

然いる。とがあるのだ。イメージだけで怒る人もいるし、イメージだけで結婚する人も当とがあるのだ。イメージだけで泣いていたり、イメージだけで笑っていたりするこているとき、イメージだけで泣いていたり、イメージだけで笑っているときや笑っもう、怖い話になってしまったので諦めて言うが、人が泣いているときや笑っ

結婚詐欺みたいなことも通用するのだ。それっぽいトランクでも持って、「国際線のパイロットさ」みたいなことを言う、そういう人がいるからこそ、詐欺も成立するのだ。パリッとしたスーツを着て、

持っていた場合、もし、その詐欺のターゲットが、思いがけず社会的なものを理解する知能を

ねきっと」
したら、それは輸出になりそうよね。あと飛行機のメーカーというと、ボーインしたら、それは輸出になりそうよね。あと飛行機のメーカーというと、ボーインと変だわね。それともやはりある種の、保税の扱いなのかしら。でも燃料を給油大変だわね。それともやはりある種の、保税の扱いなのかしら。でも燃料を給油「ねえ、飛行機の機体って、そのたびごと輸入になるの? そうしたら関税が

ていれば、引っかかる人は一人もいない。が、あんなもの、簡易裁判所からの支払督促状と異議申し立ての手続きを理解しあるいは、ワンクリック詐欺みたいなものが一時期流行し、被害者が続発した

ないことが多い。 メージでしか理解できていない人は、やはり恋愛だってイメージでしか捉えていメージでしか理解できていない人は、やはり恋愛だってイメージで、何もかもイパイロットというとイメージで、法的手段というとイメージで、何もかもイ

る男生がけっこういる。 の子はこういうことをされると喜ぶ」というイメージを、そのまま真に受けていの子はこういうことをされると喜ぶ」というようなものが流行っているから、「女最近は、たとえば「サプライズ」というようなものが流行っているから、「女

ける、という可能性が出てくる。まったくお構いなしに、企画した「サプライズ」の進行だけを嬉々としてやり続そうすると、あなたが生理痛でお腹が痛いときに、彼はあなたの様子なんか

とりあえず内心での苦笑いは避けられないだろう。あなたは彼のその熱意の「ようなもの」をどう受け取るか。難しい判断になる。

する、そして感じる」みたいなことを、イメージだけで思い込んで真に受けていその他、たとえばベッドシーンで、「女の子はこういうふうに言われると興奮

幸せ、というようなイメージを、そのまま真に受けている人だって少なくないの不動産屋のテレビCMを観て、閑静な一戸建てに家族と大きな飼い犬、それがたら、あなたは正直、そんな男性とやっていけないだろう。

メージ」を実現したいだけでしかない。の中には、あなたのことなんか存在していないということだ。彼はただ、「イの中には、あなたのことなんか存在していないということだ。彼はただ、「イ関静な一戸建ては、決して悪くないだろうが、問題は、彼の抱くイメージ世界

そうしてイメージと実存を取り違えている人は今とても多い。

「人が生きるとはどのようなことか」

れるものだ。 恋あいなんかは特に、実存に及ばないなら、わざわざそれをする値打ちが失わこの問いかけについて、イメージで回答する人は今とてつもなく多いのだ。

におかしくない。
イメージ的に、「ディズニーランドでハッピー」を、やりたい、というのは別

トナーって必要」とか、そういう捉え方もよくわかるし間違ってはいない。トナーって必要」とか、そういう捉え方もよくわかるし間違ってはいないのパーつまはじきにされる」とか、「いい歳をして交際経験もないのは恥」とか、祖会的に、「結婚していないと生活が不利」とか、「結婚していないと世間に

人間が、健全に、人間らしく発達していって、知性の到達点が「それ」だと言が、それらは、よくわかるけれど、どう考えてもうつくしくはない。

男性に、結婚願望が強い人はけっこう多い。い張るのは、あまりにも無理がある。

そして、

あなたらさきこ、そうゝう話を目り前り男生いら聞くここがあるまげごと、強く言い、自身としても固く信じている男性は少なくない。「オレ、超結婚したいし、結婚したら、嫁さんに超やさしくするよ」

居酒屋か何かの、隅っこの席で。あなたもときに、そういう話を目の前の男性から聞くことがあるはずだ。

そのとき、ふと、おかしいと感じないだろうか。

目の前の彼は、目の前にいるあなたに、「超やさしく」しているだろうか。彼の熱弁が、グッド・イメージなのはさておきだ。

別に結婚願望でなくても、

「彼女ができたら、おれ超やさしくするよ」でも

と言う

き彼に「超やさしく」されているかどうか。 その、グッド・イメージに聞こえる話に比較して、 目の前のあなたは、 そのと

それどころか、

と、投げやりに粗雑にされていないだろうか。 「お前はあれじゃん、女友達っていうか、ツレじゃん」

ツレ扱いは別に悪くない。 「お前」呼ばわりかよ、というのも、 別に悪いことではないだろう。

「イメージ」の話をしていないだろうか?

が、何かがヘンだ。

「夢があるなあ」という感じの印象は、彼の執心する「イメージ」に基

づいていないだろうか?

対してのみマジなのだろうか。 前のあなたに対してマジだろうか、それとも、 執心するというのは、いわば「マジになる」というようなことだが、彼は目の 彼自身の思い描く「イメージ」に

仮に、その日から、あなたと彼は交際することになったとしよう。

彼は、翌日に、大急ぎで指輪を買ってきた。

「ほら、これ。おれの彼女のしるしだよ」

と彼は照れながら言う。 おれ、言ってたとおり、自分の彼女は超大切にするし、 超やさしくするから、

あなたは指輪を受け取る。 彼はあなたの、姓ではなく名前を、男らしさの印象で呼び捨てにした。

気持ちがほころぶようなところも、ないではない。 が、やはり何かヘンではないだろうか? あなたはそれが、うれしくない、わけではない。

「あなた」が、彼にとって「彼女」になった途端、そんなに豹変するものだろ

あなたはあなたのままで、彼は彼のまま、実物としては何が変わったわけでも

別に「彼女」があなたでなくても、彼は同様の豹変を見せただろうということだ。 また、別の考え方をすれば、あなたに対してそれだけ豹変するということは、 相手があなたでなくても、「彼女」であれば。

うモットーは、さしあたりウソではないようだ。 が、それは、「そういう彼氏と彼女」というイメージを、執心的にやりたい、 即日、指輪を買ってきてプレゼントするあたり、 彼の「超やさしくする」とい

そうしたい、というだけではないだろうか。 このことを肯定的に見るか否定的に見るかは、とても難しいところだ。

とりあえず彼の「彼氏ぶり」が、悪意に満ちているというわけではない。 熱意と、善意に、満ちていないとも言えない。

言いうるとしたら、その「熱意」のようなものが、どこに向いているのか、

لح

いうことの疑問だけだ。

い」を向けるのだろうか? 極端なところ、マネキンを「彼女」にしたら、マネキンにも同様の

度喜ばせるはずだ。 こうして始まったあなたと彼の関係は、はじめのうち、きっとあなたをある程

ところどころ、何かヘンだ、という違和感を覚えつつも

だろうし、むしろ「こういうことって、あったほうがやっぱりいいかも」と思わ女として、そうして「彼女」らしく扱われることは、気分の悪いことではない れてくるだろう。

い彼氏彼女として、彼は浮かれているし、あなたも浮かれている。 難しく考えなくても」と思いなおすことで、処理可能だ。何せそのときは、新し 違和感を覚える、「何かヘンだ」という部分も、「別にいいじゃん、そこまで

せる、一時的なものなんじゃないの、それはしょうがないよ、と楽しく思えてく 何かヘンだと思えるところも、単に、付き合いたての浮かれた気持ちがそうさ

こともすばらしいことだろう。 ル」ぶりを笑えるようになれば、それでいいのだ。そうした経験を持てるという メージの求め合いと与え合いをし、その後落ち着いてきて、当時の「バカップ もちろん、理想的には、そうして浮かれてしまう時期に、求めていたベタなイ

きは悪くなる。 メージ的なものしか理解できない、という知能次元の男性であった場合、進みゆ だが、彼が、一時的にイメージに狂乱したということではなく、根っから、イ

なったとする。 付き合い始めて一か月という日を、記念日にして、 お祝いしよう、

いう話になる。 あなたはその日、アルバイトが入っていたので、 「夜からなら大丈夫だよ」と

ね」ということになる。 彼のほうも、「それはそれで、必要なことだからね、 アルバイトがんばって

めてするのだった。 よりによって、その日はアルバイトの仕事が大忙しで、 終業は遅くなったし

が、あなたは、アルバイトの仕事あがりに彼と会うということを、

そのとき初

正直クタクタに疲れてしまった。 仕事中、店長に八つ当たりもされて、イライラもした

その後、彼に会うと、彼は満面の笑みで出迎えてくれて、それはやはりうれ

よろこびきれる体力がないが、気持ちとしてはとてもうれしい

は「あれっ」という気持ちになる。 いつもの、 が、そのとき、あなたのよろこびようが、いつもと違って沈みがちなので、 あの甘やかなあの感じは、どこにいったのだろう。

彼

うか、空想を膨らませてますます浮き立っていたのだ。 また彼は、あなたの帰りを待っていた時間、今日という特別な日をどう過ごそ まして今日は、付き合って一か月の、特別な日だ。

彼のほうは威勢がいいので、あなたは、 そのあたりで、いわゆる、二人の「温度差」がかけ離れてしまう。

(ちょっと待ってよ、もう)

と、内心で少し溜息をつくふうになる。

疲れているのだ。

それに対して、彼が肩をすくめて何かぶつくさ言うが、あなたは疲れているの

(ちょっと、もう、気楽なこと言わないでよ)

と、わずかに苛立たしさを覚えてしまう。 (わたしにはシャワーを浴びる権利もないの?)

の「こうしたい」というイメージの温度だからだ。 こんな温度差や、すれ違いは、よくあることだし、誰にだってあることだ。 温度差があるとしても、彼にとって重要なのは、あなたの温度ではなくて、彼 が、このとき、この彼が彼氏である場合は、それでは済まなくなってくる。

たま合っていたから、彼のイメージしたとおりのことをなぞることができた。 これまでは、あなたの温度が、彼のイメージする「彼氏彼女」の温度に、たま しかし、今日のあなたは疲れ切っており、到底、そのイメージされている温度

へお付き合いすることができない。 「ごめんね、ちょっと疲れてるわ」

このとき初めて、あなたは「あれっ」と感じる。 あなたは素直にそう謝る。 が、そのあなたの声は、なぜか彼に、ちゃんと届いていない感触がする。

いた彼のほうが、傷ついて不機嫌な様子になっている。 何か、仕事あがりで疲れて帰ってきたあなたより、これまで寝転んで過ごして

あなたは、彼の機嫌を損ねてしまったことに、悲しみを覚える。

(でも、だって、仕事帰りでもいいって、強行したのはあなたのほうじゃな

と、ゆずれない反論の気持ちも起こってくる。

こうしてこの日、あなたと彼は、初めて気まずい、不仲の時間を過ごす。 それでも、翌日には、お互いに頭も冷えて、仲直りするだろう。

こういうやりとりが、通信端末で交わされる。 「いいよ、忘れて」

「いやいや、おれがどうかしていたよ。ダメだね、

おれマジで反省してる」

「ごめんね本当に」

これで、このときのことは解決する。

しかし、このままいくからには、 同じことは必ず起こってくるし、 必ず繰り返

そのうち、あなたはやがて彼について、その様子から、

(あ、これはダメなパターンだ)

というのを、先に気づけるようになってしまう。

てしまうパターンから、その本質を見抜き始める。 あなたはやがて、彼が不機嫌になるパターン、気まずくなり不仲な時間になっ

(そっか、この人は結局、自分の思うとおりにいかないとイヤなんだ。わたし

が疲れているときとか、そういうことは、わかってくれないんだ) それはちょっと、どうなのかな、という気持ちが高まってくる。

彼が、彼の友人を連れてきて、三人で食事をした後など、必ず文句を言われる。

というパターンにも気づいてくる。

かっこつかないし、おれだって人付き合いで立場とかいろいろあんだよ」 あなたは、彼と彼の友人との三人で、楽しくしているつもりだった。 「お前さあ、前も言ったけど、他の奴がいるときは、おれのこと立ててくれよ。

だがどうやら、 (そっか、彼の頭の中には、もっとこう、何か違うイメージの光景があったの

ということを理解する。 そして、

メージなんて) (そんなの、言われなきゃわかるわけないじゃない。あなたの頭の中にあるイ

と、このときはもう、堂々と溜息をつくようになっている

もちろん、そういった浮かないことだけではなく、楽しく無邪気なシーンも存 「いえ、別に。何でもないよ、気にしないで」 「どうしたの?」

なたは彼と、とてもウマが合う、という気がしてくる。 急に暖かくなった春の日や、あなたが無性に「遊びたい!」と浮き立つ日、 在する。

早く、精力的で、また実際に有能だった。 彼は、そうして彼氏彼女らしいイメージのことをやることにかけては、

「いちご狩りにいきたい。ねえ、もう行っちゃおうよ」

こうして、あなたが彼の描くイメージに適合する日、あなたと彼はとても仲良 「マジで? えー、じゃあおれ、先輩に車借りてくるわ」

それはとても楽しい記憶なので、あなたは彼について疑わしさを思うとき (でも楽しいこともすごくあったんだ)

と必ず思い直すことをする。

あなたはそうして、楽しさ半分と、我慢半分で、彼との交際を続けている。

それが決定的に破綻へ向かうのは、 あなたが「やりたいこと」を見つけたとき

それに向けて緊張感と、プレッシャーも高まってくる。 自分のやるべきことが見えてきて、のめりこみ始めた。論文発表の日も示されて、 あなたは大学の卒業論文を書き始めた。初めはおっくうだったが、いつかしら、

どこか考えている様子になる。 あなたは、忙しくなるが、それ以上に、他の時間でも卒業論文のことについて、

ずっと上の空だ。 このことは、彼をさびしがらせるだろう。彼から見れば、あなたはこのところ

あなた自身もそれは自覚していて、それをやはり申し訳なく思っている しょっちゅう、考えてしまうのだった。

彼はあるとき、ただならぬ調子で、 が、それでもやはり、ふとしたときに、

とあなたに怒りを向ける。 「お前さあ!」

嫌悪もするが、同時に、こうも思ってしまう。 あなたは、彼がそこまで怒ってしまったということに、ますます反省し、 自己

あなたは今の自分自身が、やるべきことに向かっていて誇らしいからだ。 (確かに、 わたしが悪いけど、あなたも、あなたのやるべきことを見つけて

進行なんて、わたし器用なことできないよ) かに真剣に取り組むのは初めてなんだよ。そんなに責められたって、恋愛と同時 (わたしが悪いんだってことはわかってる。でも、わたしだって、 こんなに何

変更して、彼ときちんと話せる日をもうけることにした。 あなたは、彼と、ちゃんと話し合うべきだと思い、卒業論文の制作日程を一部

「話したいことがあるの」

触の記憶から、 あなたはそうやって、話し始めてから、ある感触に手ごたえを覚える。 その感

(ダメだ)

ということを思い出す。

(そっか、ダメだ。そうだった。ダメなんだった)

(そのことこそが問題だったのに、わたし何やってんだ、馬鹿だ) (この人は、こういう話を聞いてくれる人じゃないんだった)

らえていないこの感じ) (この、いつもの感じ。 言葉が初めから跳ね返されてしまう、まるで聞いても

なたにとって) (わたしは、あなたの、 「楽しい彼女」でないといけないんだったものね。 あ

あなたは、話をつづけながら、

と、改めて「彼」という人間の感触を確かめていく。 (この感じ、この感じなのよ、この人は

> し、受け取られていかない。 こうして話をして、わかってもらおうとしても、 何か言葉は、 届いていかない

ジの何かに、流れを変えて持ち込もうとしてくる。 何かこう、ずっと、自分の得意なパターンというか、 自分の持っているイメー

この人、本当に、わたしのことなんか見てない。

めだけの存在なの? なにこれ、わたしって、あなたに一定量の、あなた好みの何かを体験させるた

然とする。 あなたは彼と、喫茶店で話していたのだが、あるシーンを目撃して、それならもう、正直、他の誰かにお願いしてよ。 改めて愕

サッと見せ、さも、 をしたのだ。 彼は、喫茶店のウェイトレスが来たところで、ウェイトレスにある種の笑顔を 「彼女を連れている爽やかな男性」と見せるような、 小芝居

か満足げだ。 彼は、咄嗟にそういうことをするし、 咄嗟にそういうことをしたとき、

(この人、本当にこういう人なんだ)

<u>...</u> [何かが割れるような感触がする]

「ねえ、あのさあ。そういうのって、本当に大事?」

「 は ?」

「ううん。いいや。わからなかったらもういい」

「なんだよそれ。お前が話あるって言ったんじゃん」

になっちゃってごめん」 「ううん、じゃあわたしが間違ってた。また今度、お話するね。 何か中途半端

は「内容はいい、すごく充実してきている」と評価してくれた。 卒業論文の、中間発表の日がきた。緊張で、口調はたどたどしかったが、

あなたは、達成感と、一時的な解放感を味わう。

卒業論文の制作にあたり、手助けしてくれている先輩たちを含め、 中間の打ち

上げとして居酒屋に行く。

五々、それぞれはそれぞれのタイミングで帰っていった。 打ち上げはワッとはじまり、その後、感慨深さからしっとりしていった。三々

あなたと、ある先輩は、歩いて帰宅できる距離だったので、 最終電車が出たあ

とも、動く気になれずしみじみ飲んでいた。

れて、自分と彼氏との状況についてポロポロ話し始めた。 あなたは、人に悩み事の相談をする性格ではなかったが、 笑ってもらおうと思って話し始めたのだったが、先輩は、 解放感と酒精に煽ら 「それはなあ」と

言って、浮かない表情をして、胸を痛めてくれる様子だった。

「そんな、暗くならないでくださいよ」

「いや、まあな。でもな」

先輩は、まあとにかく、話してよ、話せる限りのところまで、と言った。 先輩

部出してしまおうと思った。途中で先輩が、コートを肩にかけてくれた。先輩は、 ら情けない」 その挙動が、身体的に苦しい、ということを思い出した。 たら、本当に涙が出てきて、止まらなくなって泣き始めてしまった。 して、視線をやや伏せ、あなたが話し始めるのを待ち受けている。 は、あなたを焦らせるふうではないが、酔客とは思えないような集中力を取り戻 しばらくあなたの背中を撫でていたが、 そうなると、まるで「泣きそう」という気持ちになり、冗談で両目に手を当て と言い、少しの間トイレに立った。 何年かぶりに、横隔膜がけいれんするほど、ひっくひっくと嗚咽をもらして、 あなたは人にそのように迎えられるのはずいぶん久しぶりだった。 何だっけ、この感触。この記憶。 何かものすごく懐かしい感じがする。 と思い出した。 あなたは温かいおしぼりを目に当てながら、 先輩が戻ってくると、あなたはその姿を見て笑ってしまった。 顔を上げて、目をこすり、 あなたは、さんざん泣いたので、やっと気持ちが落ち着いてきた。 あなたはしばらく、テーブルに突っ伏して泣いていた。溜まっている涙を、全 泣きながら、「こんなに溜まっていたんだ」と、自分があわれになった。 「そうか?」まあ正直、こういうとき、どうしたらいいのかわからん。我なが 「そのままでいいから、何も気にせずにいて」 (そうだ) 「〇〇さん、やさしいですね本当に」 「うん、まあ、いいじゃない」 「そうですよ。でも、その、すいません。ありがとうございます」 「ここ片づけるときにバレるけどな」 「うん、まあ、大丈夫、これ保温ケースからこっそりパクってきたから」 「お店に悪いですよ」 「そうかな、慌ててたから」 「ん? いやだって、ほら、泣いてるからさ」 「え、なんですかそのおしぼり」 (だめだ、こんなことじゃ。ちゃんとしよう、先輩に悪い) 「だからって、こんなに、ここまでたくさんは要りませんよ」 あなたは、 なたのことを気遣っていただけだった。 「〇〇さん」

顔で、研究者のようにあなたの顔を覗きこんでいた。 今改めて、全てのことが統合されていくのを受け止めなおした。 よ」って) 筋肉がよれて、まともな笑い声ではなかった。 謎が解けた、という心地がして、何かが可笑しくて、ディッヒヒヒ、と笑った。 いたかった。息を吸おうとすると、鼻がズルズルっと鳴った。すべてが解決した、 たぶんしてた。危なかった。わたし、本当のこと全然見られてなかったんだ) よ。よくよく考えたら) あなたは、顔を上げて、フーッ! と大きくため息をついた。終わり! と言 あなたは、事の発端からその後に続く彼との記憶を走馬灯のように思い出し、 つられて先輩も笑ったが、先輩はまったく珍しいものを観察するようなあきれ (ある意味、彼は、はじめから何も変わってない。 初めからずっとそうだった (あれって、何よ。全然、ウソだったじゃない) (このままいったら、わたし、彼と結婚してたかもしれなかったもの。ううん、 (それで、なんというか、これでよかったよ。正直、こんなもので済んで) (だから、わたしがバカだったんだ。あまり、人のこと言えない)

あなたは無敵になった心地が一瞬した。 「何か、笑ったねえ」 「すびぱせん。何かもう、逆に可笑じくて。カッカ

「 ん ? 「え、あ、はい」

「〇〇さんは、本当にやさしいです」

「そりゃ、ほう」 「わだじが保証じます」

「どこかの誰かとは大違いなんです」

「うーむ、怖いこと言うなあ」

少し期待もしたが、先輩はそういう発想を持っていなかったらしく、ひたすらあ 先輩はあなたを、あなたの下宿近くまで送ってくれた。求められるかな、と、

むしろ、 抱かれたかったのに、 抱いてほしかったのにな、とあなたは思ったが

(まあ、もう、それどころじゃない、今は)

と気を引き締めなおした。

帰り道、先輩といくつか話をした。

「〇〇さんは、彼女さんとかいないんですか

「いないよ」 「やさしいのに」

ああ、そうだった……

(あれは、何だったの。言ってたね、

「彼女ができたら、おれ超やさしくする

「いーやぁ? おれはそういう、女の子とラブラブ仲良しって、そもそもそう

29

いうキャラじゃないしな」

「へー、そうなんですか」 「自慢じゃないが、女の子とそうして仲良くやれる自信、まるでないよ」

「逆に、上手くいかない自信が確然とある」

「そんなこと、ないと思いますけど」

「ははは、なんでわたしが○○さんをだますんですか」 「いーやぁ、おれのことは、おれが一番よくわかってる。だまされんぞ」

新しい世界を見るような気分だった。 その話を聞きながら、あなたは、「本当に大違いだ」と、いっそ感心していた。

(確かに、わたしが○○さんと付き合うとか、そういうことはなさそうだけれ

(絶対、この人のほうがいいよ。なんでだろ)

うって感じるんだろう。あー、いやでも、わかんないけどね。そういうのって、 本当わかんない。決めつけられることじゃないし、決めつけないほうがいいよ (わたしはどうして、○○さんとは、付き合うとか、そういうことはなさそ

れでもなんとか煙草を吸おうと悪戦苦闘していた。 アパートの二階、あなたは下宿に戻った。いつも通りの散らかった部屋だ。 カーテンを開けて、下を覗きこむと、先輩はライターの調子が悪いらしく、 そ

あなたは窓を開けて、 「〇〇さーん」

先輩はあなたを見上げた。

わたし、頑張りますし、できたら最後まで、○○さんに支えてもらいたいんで 「あの、わたし、卒論がんばるんで。その、最後まで、付き合ってください。

手のひらにOKサインを示して掲げてくれた。 先輩は、照れくさそうに、そんな気にすんな、という手振りをして、その後、

はついたようだった。 というしぐさをして、背中を丸めて、歩いて帰っていった。なんとか、煙草に火 そして、なお話そうとするあなたに向けて、もう夜中だぞ、でかい声だすなよ

\*\*\*

文学史上まれに見るバランス感覚の悪さで、長大な例を話したが、これは

これで逆にオモロイということでこのまま掲載するが、それにしても、「イメー ジ」というのはそういうものだ。

性にも、いまいち好感が持てない、何かどうしても引っかかる気がする、という ほうが正しい。 これほど、元の話が消えて、元の話の説得力が消失するケースも珍しいだろう。 男女の一幕について、小説めいて話したが、ちなみに、この場合、主人公の女

誰にでもわかる。ただこんなものは、誰も読み直したくはならないが。何が引っかかってそう感じられるのかは、面倒なので説明しない。読み直せば そういうふうに書いた。現在、リアルさで書くならそうするしかないからだ。

触を覚えるのは、かなり正しい。 主人公の女性が、何か「傲慢」な気がする、それも何か根本的に……という感

そしていつか「クラッシュ」が……と予感されるのは、かなり正しい。 先行きを考えたとき、暗さというより、うすら寒さや気持ち悪さが予感される、

怖い話になるのでやめよう。

それで、何の話だっけ? もうどうでもいい気がしないでもない

だった。 力ずくの強引さで、話を元に戻すと、知能の程度と、理解の限度、という話

そういう話だった。 高等の知能は、実存的なものを、直覚できるようになる。

中等の知能は、

初等の知能は、イメージ的なものしか理解できない。

社会的なもの・構造的なものまでを理解できる。

そして、

<<イメージと実存を取り違える人はとても多い>>

ということだった。

分にある。 このことを、人に疑ってかかるいうのは悪趣味だが、手探りしてみる余地は十

その方法は、

「総理大臣って、つまり何?」

と訊いてみることだ。

それについて、適切に、社会的なものとして答えられる人は、実は少ない。 「国のことを決めている、一番偉い人でしょ。あと何だっけ、 社会科で習った

よね。たしか、天皇が任命するんだよ、総理大臣は特別だから」 △、中等知能に至っていない人が、高等知能の実存だけ先に獲得しているという そういう答えが返ってくるたびに、あなたは少しばかり慎重になっていい。

のは、甚だ怪しい>>と。 彼が、いかに一見、堂々としているように見えても。

語気が強く、よく笑い、自信と積極性があるように見えても

脂綿のように、油つけ無く見えても。 あるいは逆に、まるで川辺の柳のように、恬然と穏やかに見え、その顔面が脱

30

将来の夢をよく語るように見えても。 「意識が高い」ふうであったり、男女観が勇ましく、 結婚願望がほ

嘆きと怒りを強く表すように見えてもだ。 映画を観てよく泣き、音楽を聴いてよく感動し、 戦争のニュースに

る人間は、発想の機構がヘンだ。 「総理大臣って、つまり何?」と訊かれたとき、それを「勢い」で返そうとす

何もかもを、イメージでしか捉えていない、知能が初等のタイプの人間かもし

して、それで通用すると思い込んでいるだけなのかもしれない。 それで、よくよく見ると、彼は「イケてる人」のイメージ演出を自分にほどこ

く笑う、となることはよくある。 その結果、野放図に堂々としたふうになり、傍若無人に積極的、パワフル、よ

うイメージにしていくか」、その演出に臆面がないことがあるので、それが一見 アイデンティティがあるふうに見えることもよくある。 あるいは、本当に知能がイメージ世界に限定されている人は、「自分をどうい

執心を持つ人はいるのだ。 イメージは、イメージでしかないが、その自分の思い描いたイメージに、 · 強い

いことを言うだろう。 「人が生きるとはどういうことか」について、彼もときどきは、何かそれらし

が、そのとき、彼の言うことは、常に何か定番の「イメージ」に収まっていな

られた定番の「イメージ」をなぞっているだけではないか。 彼は、物事を感じやすいタイプに見え、感じたままを素直に言う大胆さにも見 彼は、「我が道を行く」感を見せているが、その「我が道」は、すでによく知

を話す人間か、それとも、「イメージに刺激されたまま」の興奮を放り出すタイ えるが、彼が映画を観たあとの様子はどんな具合か。彼は本当に「感じたまま」

際してもうれしくない。

もちろん、単に社会的なものだけがわかっているだけの、

ただのおじさんと交

まれることのほうが、はるかに危険で数が多い。これは今まさに、実際的な問題ただそれよりも、まず可能性として、「イメージと実存の取り違え」に巻き込 ら、もちろんその実存が触れ合える人と交際するべきだということだ。 るとはどういうことか」の直覚へ、直接の足しにならなければ意味がないのだか そういうことではなくて、特に恋あいということになれば、それは「人が生き

演出、純愛主義の演出、平和主義の演出、特に「心のきれいな人」ふうの演出な しないからだ。このことには、どうしても警告風味が混入せざるをえない。 イメージの、強いふう演出や、親しみやすいふうの演出、「イケてる」ふうの まさか、本当の本当に、初等の知能のまま止まっているなんて、普通は考えも

どに、だまされてはいけない

本的にまともじゃないわ」 「総理大臣ってつまり何? こんな質問にさえきちんと答えられない人は、 基

と、きつめの調整で、心構えをしておいてもよいぐらいだ。

ち」は、同格ではないので、同等にまで大切にしなくていい。 人の、「人に向ける気持ち」は大切にするべきだが、「イメージに向ける気持

持ち、ささやかな執心は、付き合ってもらえばいいし、付き合ってあげれば が、そのことのためだけに、人の存在を利用していいわけではない。 ディズニーランドに行きたい、バカップルがやりたい、というイメージへの気 切り捨てたり、踏みにじったりまでは、決してするべきではないけ

りたい、わたしはあの人を支えて生きたい」というわけではない。 ズニーランドと同じく、それは一つの「夢」のようにも思われている。そういう 強い執心がある女性は多い。子供心のころから植え付けられているからだ。ディ 人が「結婚したい」と言う。そのとき、特定の誰かを指して、「あの人の妻にな 子供心に見た「夢」を、そのままに執心していてよいのか。あなたは今もまだ 特に、「花嫁姿」のイメージ、「ゴールインでうらやましい姿」のイメージに

いイメージ、内心のライバルに、差をつけて鼻を明かしてやる「してやったり」 イメージ。それらは全て「イメージ」だ。 のイメージ。また、その逆をやられるのは絶対イヤ、絶対負けたくない、という 正、その子供心のままなのか。花嫁姿のイメージ、「ゴールイン」でうらやまし 子供なのか。子供心に植え付けられたあこがれのイメージだとして、あなたは真

のことに臆面もない、そんなことはまともだと言えるか。まともであるはずがな りのイメージへの執心を満たすために、何もかもをペテンに掛けようと考え、そ りたい。そりゃ誰だって……その幸運はすばらしいことだ。だが、その自分かぎ そんなことは間違いで嘘っぱちだと、本当は大人なら誰だって見当がついている。 ほんのり執心の残っていたイメージが、めぐり合わせで、満たされることを祈 「人が生きるということはどういうことか?」。まさか、そういうことなのか

すべて込め、 が大事で、人は正直どうでもいいのと、そんなことがまともであるはずがない。 僕はしばしば、そうしてイメージへの執心に狂乱する人に、そこまでの意味を 人に向ける気持ちより、イメージに向ける気持ちのほうが強いから、イメージ

「総理大臣って、つまり何?」

きっと、最短で、間違っていない。 この方法は、遠回りすぎて、いっそ奇想天外、 荒唐無稽に聞こえる。

もちろん、ここまで言うからには、あなた自身も、 イメージで答えるな、もう子供じゃないんだとっくに、ということなのだから。 決して初等知能のイメージ

本当は、誰も結局許さないだろう。 僕は、大人がコドモみたいであることを、結局許さない人間であってはならないということだ。

解して、感動を得ていくことだ。 ちゃんと、知能を向上させて、社会的なもの・構造的なものを、よく知り、

理

からのことだ。存の直覚は、知能の発達として、あくまで中等をこなした上で、高等へ到達して存の直覚は、知能の発達として、あくまで中等をこなした上で、高等へ到達してういうことか。恋あいの上で生きるということはどういうことはどうれい生きるということはどういうことか。女として生きていくということはどんが生きるということはどういうことが。女として生きていくということはど

求めることは成立しない。 いくらご気分に沿わなくても、「中等はナシで」と、飛び級して実存の直覚を

「何も知らないけど、本当の大切なことは、全部わかっているの」というつもイメージと実存を取り違える人の動機のほとんどはそれだ。

なぜ自分だけ免強しずに許されて進めると思うのか。なぜ自分だけ勉強せずに許されて進めると思うのか。

りでいたがる。

「総理大臣って、つまり何?」それは、逆説的に、知能が子供のままだからだろう。

メージ商売で生きていく人間ではない。 アイドルタレントは、イメージ商売だから特殊な演出をするが、あなたはイこのことに、いつまでも、イメージで答えていて本当に許されるのか。

僕もあなたも、同じ、ただの一個の人間だ。それがどうして、あなただけ、いくことはできないし、かわいくもなれない。イメージ商売から植え付けられた「かわいい」のイメージで、あなたは生きて

なら、そのまま生涯の伴侶として結ばれてしまう。 あなたはきっと、同程度の知能次元の男性とお付き合いすることになるし、何あなた自身、特に恋愛を、イメージでしか捉えていなかったとしたら大問題だ。「イメージ」の演出で、何かを稼げると思うのか。

あなたがアイドル演出を続け、彼が少女マンガ演出を続けるなど、何年も続かいうのでは大変だ。実りのない苦行を続ける様になる。お互いその先、一生、グッド・イメージの小芝居をし続けなくてはならないと

に、「総理大臣って、つまり何?」を回答できるよう、あのまま覚えてしまうこることだ。そのために、さしあたり悪くない方法は、冒頭に書いてあったとおり、そういったストーリーにならぬよう、何ができるかというと、知能を向上させないどころか、数ヵ月、あるいは数週間だって続きはしない。

つまり勉強することだ。

あの程度のことは、誰だって知識として回答できていいし、回答できるように

[総理大臣って、つまり何?/了] 頭に申し上げたとおり、そうしているときの女は、健全で健気でうつくしいのだ。 それは、脳に滋養が届いて、知能が覚醒しようとしている合図だ。そして、冒でこういった勉強をしなかったのだろう」と、自分に驚いているはずだ。 なったとき、あなたはそれについて気分が悪くなく、むしろ「わたしはなぜ今ま

### 小説を求める心 について

慌てて題名に「余談」と付け足すことにした。 まったく僕自身にしか関係のない話題で申し訳ない

小説は衣食住のように生活の必需ではない。

える。 映画のような娯楽性も低いので、いわば人間にとって最も必要がないものだとい バラエティ番組のような気楽さや、マンガ・アニメのような刺激性もないし、

うに、読んで役に立つということもないのだ。 ヴィデオゲームのようなアクティビティもなければ、知識本やノウハウ本のよ

読むのはおっくうだろう。 気分転換してスカッとしたいというなら、旅行に出るほうが断然よく、 小説を

それによって、僕も無理をしないたちだから、小説を求める心がない。 小説は人間に最も必要ないものであり、必然、人間には小説を求める心がない

そのものがないので、 小説を読むのが趣味、という人なら、小説を読むかもしれないが、僕には趣味

「ああ、そろそろ小説が読みたい」

とはならない。

街中をすれ違うおじさんやおばさんについて、友人になりたい、とは別に思わこのことは、人間関係や男女関係によく似ている。

何かの機会で、知人にならねばならない、という場合、決まって本心はおっく 渋谷区や目黒区を歩けば、たくさん美人とすれ違うが、その美人といちいち友

的にはおっくうだ。 るが、そんなウマイ話はないので(いや、ないとも限らないが)、とにかく基本 はじめから、あなたの言いなりになってあげる、ということなら前向きになれ

人になりたいかというと、別になりたくない。

た誰かと友人になりたいとはふつう思わない。 なところはあるのかもしれないが、さすがにそんな人は珍しいもので、 らところはあるのかもしれないが、さすがにそんな人は珍しいもので、すれ違っよほど友人のいない人なら、「誰か友人が一人でもいてくれれば……」みたい

すれ違う誰かが、よほど面白い人なら、友人になりたいと思う、かというと、

ないし、だいいち「面白い人」などというものは、そうして切り取って存在する そういうこともやはりなくて、面白い人と友人になることが別に面白いわけでは

プロ格闘家と相席で食事をしても、きっと何も面白くないだろう。 試合をしている格闘家は、観ていて面白いからプロ興行が成り立つわけだが、

はしたくない。 たくないので、面白くないものを面白がっているふりをする、というようなこと 僕は、自分の生活に特別な主義があるわけではないが、ただしんどいことはし

けが起こるチャンスに賭けるというよりは、 充実しているフリや、楽しんでいるフリや、面白いフリをして、何かのきっか そのまま充実せずに過ごすほうがマ

いし、内心ではなんとも思っていない小説を、趣味として読んでいくこともでき よって、内心ではなんとも思っていない人付き合いを続けていく気にはなれな

おそらく、僕は、空白を埋めないたちなのだ。

たら、その埋め立て作業にかかるしんどさのほうが、僕にはうとましいのだ。 渋谷駅地下の「フードショー」でラムチョップを買ってきて、ガスコンロでデ前、中目黒で、信じられないぐらい不味いラム肉のソテーを食べたことがある。 空白が、うれしくないという気持ちはわかるが、それをフェイクで埋めるとし

タラメに焼いたほうがはるかにマシだ、というようなソテーだった。 僕は、泣きながら、新小岩の玉川屋で天ざるが食いたい、と思った。

のではないだろうか? きらびやかな内装と合わせて、あれはみんなで「食事しているフリ」をしていた その不味い店で、金持ちそうな外国人の大ファミリーも食事をしていたのだが

リ」をしてくれと言われるのだけは、ごめんこうむるのだ。 僕は、不味いメシに激怒するタイプではないが、それで「食事をしているフ

コストというより、「どこどこまで食べに行く」という労力のコストだ。 油とマヨネーズでねっちり和えて、オーブンで焼いたものはすこぶる旨いと思う。 美食も、もちろんするが、美食というのは、コストが膨大にかかる。支払いの 僕は別に美食家ではないので、チープなメシでもよろこんで食う。鶏肉を、醤

年に四回行け、ということになると、さすがに労力のコストを負いきれない。 あ、新幹線が通れば、もう少しマシになるな…… すでにこれまで、魚を食うためだけに、富山に十回近く行っているが、これを

くれるので、どちらかというとそちらのほうに行きたい。 ないので、それもめんどうくさい。平井の……あの店でも、十分なものを出して 銀座のオステルリーに食べに行くとなると、さすがに身なりを整えないといけ

ることが大の苦手である僕にとっては、それだけでも多大なコストだ。 それでも、前日には予約を入れなくてはならないのだから、明日の予定を決め 美食家とか、努力家とか、いろいろな「○○家」という言い方があるが、それ

頑張りたいのではなくて、最大限の楽をしてもそれぐらいのコストはどうしても かかるということだ。 で言えば僕は「楽家」みたいなものなので、しんどいことは受け付けないのだ。 もちろん、文章を書きながら、丸二日ぐらい徹夜したりはするが、それは別に

そんなわけなので、僕は、見知らぬ人と友人になりたいとは思わないし、 労力のコストが最低限かかるということは、別に美食と変わらない。 見知

らぬ小説をわざわざ読みたいとは思わない。

迫ってこないキャラクターの名前を覚えてあげる気にはまったくならないし、努 放り投げてしまうことにしている。 力して理解しないと見えてこないストーリーなら、ストーリーなど知らないまま い主張を汲み取ってあげようなどという気持ちにはまったくならない。こちらに その小説の、「いいところ」を探す気になんか到底なれないし、聞こえてこな

勢もない。 こうして、僕には、小説を求める心がなく、小説を前向きに認めようという姿

り観劇に行くことはないだろう。 えあまり読んでいない。家の近くには小さな劇場があるが、罰ゲームでもない限 テレビドラマはほとんどこれまで一話も観たことがないし、思えば、マンガさ

に特別に嫌っているのでもない。無関心だ。 つまり、僕は、小説に限らず、物語作品が好きではないのだ。かといって、 別

に対しても僕は無関心だ。 僕が、見ず知らずの人間に対して無関心であるように、見ず知らずの物語作品

を買いに行く。それは必需なのでわかるが、小説が好きとか人間が好きとかいう ことはまるで必需ではない。 だろう。僕はケンタッキーフライドチキンが好きなので、ときどきテイクアウト この二つはよく似ている。 僕がもし、「人間が好きだよ」などと言い出せば、周囲が僕を緊急入院させる

\*\*

「自分のもの」になっている、 だからこそ、小説や人間が、いつの間にか自分に触れてきて、いつの間にか そういう現象が起こることに、 特別な尊厳を覚え

男が、女をナンパしようとするとき、このことを肝に銘じておかねばならない。 ナンパしたくなるほどきれいな女が、きっと正体が素敵でないと確信できる男 人間に、小説を求める心なんてないのだ。人間を求める心などないように。

との出会いなど、求めているわけがない。

単純に良心の呵責と法律によってのみだ。女性には、腕と雰囲気のいいエステ 話したい、と求める心はない。 ティックサロンで150分癒されたい、と求める心はあるが、ナンパ男と15秒 女性がナンパ男をハンドガンのホローポイント弾でメッタ撃ちにしないのは

にされるだろう。 ては恐怖だ。法律が改定されたあかつきには、翌日にもマシンピストルで蜂の巣 そこのところを誤解していると、まず誤解において気持ち悪いし、

う?」と求める心は、それなりに女性にはあるのではなかろうか。 ナンパ男を、マシンピストル二丁で、メッタ撃ちにしたい、「どうなるんだろ

それでもし、引き金を引こうとしたら、その瞬間、

「よけられちゃった」

ということがあれば、その女性も、そのナンパ男の話を15秒だけ聞いてみた 「今何が起こったの?」と、求める心は起こるかもしれない。

それを立ち止まって聴くのは病的にさびしい人だけだ。そんな人は数万人に一人 しかないので、ほぼ100%の人は立ち止まって聴くことはしない。 シャンなども同じだ。たとえ新宿南口の壮絶な人通りの道端で歌ったとしても、 よくよく考えてみれば、そういうのは、路上で歌っているストリートミュージ

恰好で気持ち悪くても、バカにする気にはなれない。 に求められていないか」を生身で確認しようと手探りしている姿は、どれだけ不 かといって、尊敬するわけでももちろんないが、そうして「自分が世界にいか僕はそういう人のことをバカにしているわけではない。

それを確認したいんです、そこからやっていきたいんです、ということなら、や には必要だと思う。 はりバカにする気にはなれないし、それぐらいの迷惑行為は許容する度量が人類 通りすがりの人々に、迷惑をかけて、内心で死ぬほど申し訳なくても、自分は

逸れたのか、逸れていないのか、それさえよくわからないが、話を戻そ

人間には小説を求める心などない。

だけでは事実に反する。 が、もしそうなら、小説など悪趣味以外の理由に存在しえなくなるので、

ろう? 小説が読まれる・受け取られるということの前後には、 何が起こっているのだ

僕は、小説を読みましょう、と呼びかける思想運動を始めるつもりは一ミリも

「いいねえ」と思えてしまう余地がある。 むしろ、小説なんか読んでいるやつを、 バカにしよう、という運動のほうが、

真相は、おそらくこうだ。

人間には、小説を求める心などない。

が、目の前に小説があり、示される、その瞬間は別だ。

それをこそ人間らしい心というのかもしれないが、それはまあ今は言わなくて 小説が目の前に示されている、その瞬間、人間は人間らしい心を失っている。

目の前にあるそれが、小説に見えてはならない。

えた瞬間、「要らない」と判断されてしまうからだ。 人間には、小説を求める心などないので、目の前にあるそれが「小説だ」と見

小説は有象無象の大量生産をされており、人々を辟易させている。 小説そのものには、罪はないが、今は印刷技術や省コスト化によって、 すでに

店は、それによってことごとく閉店に追い込まれている。 「辟易」によって、人をゲンナリさせることは、それ自体が罪になる。今、書

映画や音楽CDも似たような状況だろう。

ねえつってんだろ」にまで昇格している。 「辟易」によって、今小説は、「要らない」というレベルを超えて、 「要ら

てんだろ」とは言わないだろうが、僕には事情もないしやさしくもないので、 「要らねぇつってんだろ」とそのまま言わざるをえない。 何かしらの事情によって、「やさしい人」になっている人は、「要らねぇつっ

という感じのものだ。 「小説」というと、タイトルがあって、「著者」か何かをあれこれ言いだす、

て、こちらが頭を下げて耐え忍んでいかないと、成立しないものだ。 交的に受け止めて、「お付き合いしますよ」と、一時的な「やさしい人」になっ エンタメものだな、と、「著者」がやりだすそれを見ながら、「はいはい」と社 ああ、文学風だな、ああ、私小説ふうだな、ああ、ミステリーふうだな、ああ、

今、そういう具合に、本当になっている。

きぐらいは、付き合いますよ、と鷹揚さを発揮する、そういう形態に今なってい き合いしないと罪悪感があるので、「今日は十分ヒマがありますから」というと みんな辟易しているのだからしょうがない。辟易しているが、いくらかはお付

肯定的に評価できるようになるものだ。 しきり付き合ってみれば、「まあ悪くなかった」「以外に面白かったかもな」と、そして、食事の誘いや、職場での気乗りしない飲み会のように、それでもひと

気楽になれる、ということでしかない。 ただし、肯定的に評価できる理由の根本は、もうそれが「済んで」いるから、

人間には、小説を求める心なんかないし、「著者」に「お付き合い」する動機 「ちょっとは付き合わないと、気が咎めるから」という罪悪感においてしか

説だ」と認知されたら終わりだ。 だから、目の前に示されたそれが、 「小説だ」という認知に当てはまり、

辟易の心が立ち上がり、

「要らねぇつってんだろ」という、当然の反応が起

これで、明らかになるが、「小説」を書くことはとてもむつかしくなる 逆説的だが、「小説」を書いてはいけないのだ。

それはもう、あふれかえって辟易のものだからだ。

ただ、目の前に示されたそれが、「小説だ」という認知を起こさせずに、 目

前にあったとき、人は人間らしい心を失うので、そこが糸口だ。 「著者」が聞こえてこない。主張が聞こえてこず、文学風が聞こえてこない。

ミステリーが聞こえてこず、エンタメが聞こえてこない。 そのとき、人間は、〈く目の前にあるものと溶け合っている〉〉が、この溶け合っ

ている状態になって初めて、小説を求める心というのもありうるのだ。 の「溶け」の中には、小説を求める心もあるのだ。 人間には小説を求める心などないが、目の前のものと溶け合っているとき、

それは人を求める心も同じだ。

き、その「溶け」の中には、人を求める心もある。 人間には、人を求める心などないが、目の前のものと瞬間、 溶け合っていると

「溶け」とは何か?

近い。 それは、理解や価値観にまったく興味を持てなくなった状態で、 酊の状態に

があるとしたら、それは何でもかんでもに「いい……」と言ってしまう状態だけ 人間は、小説に「いい」なんて言わないので、思わず「いい……」と言うこと

それは男女の恋仲によく似ている。

たく興味を持てない状態。意識が起立する気をまったく失っている状態だ。 酩酊で、何でもかんでもに「いい……」と言ってしまう。理解や価値観にまっ

う状態があるのだということを、 小説家は、読み手に、何でもかんでもに「いい……」と言ってしまう、そうい 小説家は、読み手に、 「いい」と言わせてはだめなのだ。 思い出させるか、もしくは、 教えなくてはなら

ないのだ。 「余談、 小説を求める心について/了